

---

# 銀河リリカル伝説

龍

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

銀河リリカル伝説

### 【Nコード】

N8694N

### 【作者名】

龍

### 【あらすじ】

ふと思いついたまま書きなぐる、銀河英雄伝説×魔法少女リリカルなのはStrikerSのクロスオーバー！

JS事件解決後、平和に、それなりに物騒に毎日を送っていた機動六課に出撃命令が下る！

懐かしのアースラクルー及び何故か同行しているユーノと共にな

は達が銀河英雄伝説の世界に乗り込んだ！

## プロローグ（前書き）

この物語の設定は御都合主義です。

なにか御意見等ございましたら是非感想という形で自分まで。

尚、あらすじにもありますように、作者の妄想を書きなぐるだけなので、基本更新は不定期です。  
ご了承ください。

## ブローグ

「目的地まで、後1時間」

次元航行艦『アースラ』の艦橋で、オペレーターのエイミィが統括官兼艦長代理のリンディ・ハラウンに告げた。

「皆、そろそろ準備して」

現在アースラの艦内には『機動六課』を始めとし、クロノ・ハラウン、ユーノ・スクライア、それにアースラの武装隊が出撃準備をしている。

そもそも事の発端は数週間前、新たな次元世界が見つかった事由来し、発見した部隊がそのまま調査に当たったのだが、その際にいくつかのロストロギア反応を感知した、と報告を受けた時空管理局上層部は機動六課に調査、及び可能ならばロストロギアの確保を命じた。しかし手の空いている艦が無かったので、老朽化したアースラが引っぱり出されたのだ。

クロノは本来『クラウドディア』の艦長なのだが、クラウドディアは現在定期メンテナンスのため動かせず、急遽アースラ入りが決定した。

これには、期待の人材に出来うる限り経験を積みせようとする管理局の思惑もあった。

統括官であるリンディが直接指揮を取っているのは、万が一その世界に近代的な政府やそれに該当する組織が存在する場合に、管理局の代表として対応するためである。

以前、同じように新たな次元世界を発見した際に、艦長が対応するも政府側は

「話をしたければトップが来い」と交渉を拒否。

これに対し激怒した艦長により、あわや戦闘寸前まで行った事が過去にあり、それ以来新たな次元世界の探訪には必ず相応の地位と能力を持つ者が指揮を行うようになったのだ。

ユーノも無限書庫司書長として有事の際にリンディを補佐する事になっている。

機動六課部隊長八神はやて以下、留守番を除いた10人の隊員が転送ポートへ向かう。

これからふりかかる事など気にもせずに……………。

宇宙歴794年、帝国歴485年、ヴァンフリート星域。

この世界に干渉しようとする存在など露知らず、この年最初の銀河帝国と自由惑星同盟の軍事衝突が発生した。

この星域は、イゼルローン回廊の同盟側出口周辺に位置する恒星系である。

8個の惑星と数多の小惑星、衛星を持つ。

その第4惑星の第2衛星、通常の4分の1の重力と窒素を主成分とする薄い大気を持つ不毛の地に降り立った機動六課の隊員達を先ず極寒が襲った。

『にやああああ、寒いようううう』

機動六課、スターズ分隊の隊長高町なのはが念話で情けない声を上げる。

それもその筈、あちこち露出しているBリアジャケットJでは。

因みに彼女達が念話で会話しているのは、大気が微量であるため音が聞こえないからだ。

何故こんな場所に自分達が送られなければならないのか、それはこの近くにロストログリア反応が有ったからだ。

それ自体は大したこと無い、楽な任務だった。  
なのは達はガタガタ震えながら必死で封印し、さっさと帰ろうと

したのだが、何故かアースラとの連絡が付かない。

結果、B Jとデバイスのお陰で凍死こそ免れているが、満足に息もできず、寒さに震える迷子達が10人出来たのだった。

『はやてちゃん、ど、どうするの?』

『どうしようもあらへん、とにかく助けを呼ばな………  
・私ら皆凍死するで』

## 三つの赤へドライロツト 前編

前回に引き続き、絶賛迷子中の機動六課。

彼女達はガタガタ震えながら助けを求めて、たまたま南へ下っていた。

しかしそこは主人公補正。  
ちゃんと救いはある。

この衛星の南極には同盟軍の補給基地があつたからだ。  
因みに北極には帝国軍の拠点があり、拠点構築を知った同盟軍は偵察を行おうとしていた。

奇しくもはやて達は鉢合わせしてしまったのだ。

『皆、向こうから車が来てる！』  
空中でそう叫んだのはライトニング分隊隊長フェイト・テストロツサ・ハラオウンである。

隊内1露出の多いBJを纏っている彼女は、この中で一番生きた心地のしなかった人間だろう。

はやて以下隊員達の目に光が灯った。

装甲車に乗り、単身偵察任務に出てきていた“薔薇の騎士”ローゼンリッター連隊第12代連隊長ヴァーンシャッフエ大佐は、此方に手を振っている不審極まりない集団を発見した。

なんせこの環境下で、自分のように陸戦用の装甲服どころか宇宙服さえ纏っていない。

しかも全員が女性であり、さらに大半が子供。

彼は腰のブラスターに手をかけて彼女達の前に装甲車を停めた。

もし不審な行動を取れば即座に撃ち抜くつもりで。

其処からは身振り手振りの会話だった。

なんせ向こうは通信機を持っていない。

なので大気の薄さのせいで音が聞こえないのだ。

お互いに手話など心得ていないので難航したが、要約すれば“助けてくれ”。

ヴァーンシャッフエは考える。

この劣悪な環境下で、凍死どころか凍傷すら起こしていない、一番可能性が高いのは軍の新技术。

民間企業がこのような場所にいる筈が無いし、同盟軍ならば自分達に何らかの通達があってもおかしくは無い。

第一何故此処にいるのか理由が想像出来ない。  
ということはこの集団は帝国の関係者？

つまり敵か？

少なくともこの衛星にいる以上、帝国軍の拠点について何かしら知っている可能性がある。

つまりこいつらを捕虜とする事は偵察任務の一環と考える事が出来る。

そこまで考えると彼ははやて達を装甲車に乗せてやることにした。

はやて達は、とにかくこの寒さからどうやって解放されるか、しか頭に無いのでヴァーンシャッフエの考え等知った事では無かった。

同盟軍後方支援基地司令官シンクレア・セレブレッゼ中將はデスクの上で頭を痛めていた。

帝国軍の進駐を発見し、偵察を命じたところまでは良かった。

しかしヴァーンシャッフ大佐は、帝国軍の情報ではなく怪しさ満点の女子供を10人も連れて帰って来た。

大佐本人からは一応の事情は聞いている。

そこで中将は

「自分のした事には自分で責任を取れ」と、大佐に尋問を任せている。

全く、今この瞬間にも帝国軍が攻め込んで来るかも知れんと言うのに！

一方、“薔薇の騎士”連隊本部、連隊長室に案内された事情説明組は機動六課の隊長クラスの人だった。

FW組は別室に案内された。

「さて、自己紹介だが、私はこの自由惑星同盟軍大佐であり“薔薇の騎士”連隊の連隊長、ヴァーンシャッフ大佐だ。君達は？」

「私は、“機動六課”部隊長八神はやて、こっちが・・・スターズ分隊長の高町なのは、副隊長のヴィータ、ライトニング分隊長のフェイトと副隊長のシグナムです」

「機動六課？それは帝国軍か？」

「いいえ、私達は軍ではありません。それと、此方からも聞いて良いですか？」

「なんだ？」

「『アースラ』と言う艦を知りませんか？」

「いや、聞いた事は無い」

「そうですか………」

「それでは………ちょっと待て」  
連隊長室に電話の呼び出し音が鳴り響いた。

ディスプレイにセレブレッゼ中將の顔が映り、言葉を交わす。

電話を切った彼は急に真剣な顔になり、部屋を出ていこうとしたのをなのはが呼び止めた。

「あの、何かあったんですか？」

ヴァーンシャッフエは、少し迷った後、正直に言った。

彼には、少なくともなのは達が帝国軍の者には見えなかった。

彼女らが帝国のスパイなら、わざわざこんな手の込んだ演技をする必要は無い。

「帝国軍の偵察機を発見した。恐らく数日の間に連中は攻め込んで来る。・・・・・・大規模な陸戦が起こる可能性が高い。君達は部屋に帰って休んでいてくれ」

### 三つの赤 中編（前書き）

あの男が居るのは単なる作者の御都合主義です。

単に書きたかっただけです。

## 三つの赤 中編

セレブレッゼ中將が各陸戦隊長を召集して開いた作成會議が終わり、ヴァーンシャツフェ大佐は4人の部下に荷物を持たせ自身の部屋に戻って来た。

部屋には待つように言っておいたはやて達があり、戻って来た彼等を見て、

「あ、あの・・・」

と口を開きかけたが、そこを

「おやおや、連隊長殿は中々のやり手で。流石の小官といえど一度に1人が限界なのに連隊長殿は5人も集めてハーレムですか？」

「違う！こいつらが例の捕虜だ」

「成る程、例の迷子の子猫ちゃん達ですか」

「“子”は余計や！」

思わず突っ込みを入れてしまったはやての声で本来の用事を思い出したのか、最初からかうつもりだったのかは解らないが、とにかく2人は言い争いを止めてはやて達に向き直った。

「すまない、見苦しい所を見せた。此处に居るのは私の部下で副隊長のワルター・フォン・シェーンコップ中佐、そして」

「同盟軍大尉、カスパー・リンツです」

「中尉のライナー・ブルームハルトです」

「同じく中尉、カール・フォン・デア・デッケンです」

「自己紹介が済んだところで、君達に渡す物がある」

そう言う彼女らに10個の装甲服が渡された。

「恐らく戦闘はこの基地の防衛戦となる。流れ弾でも飛んできたら困る。着ておけ」

そう言う彼等はさっさと部屋から出ていった。

これから2000人以上の隊員全員に指示を行うのだ。

「着ておけ、と言われてもなあ……………」

はやてが渡された装甲服を見ながらつぶやく。

「寒くないのなら何でも良いよ……………」  
同じくつぶやくフェイト。

「BJ、あるんだけど……………」  
同じくなのは。

ベルカ騎士の2人は何も言わないが、恐らくフェイトと同じ気持ちだろう。

「レーダーに感あり！帝国軍の陸戦隊です！」

基地前方に展開した約2万の同盟軍陸戦隊の視界に、優に10万はいるであろう帝国軍が現れる。

両軍の通信回線が開かれた。

最初に声を上げたのはシェーンコップだ。

『帝国軍に告ぐ。無駄な攻撃は止め、両手を上げて引き返せ。そうしたら生命だけは助けてやる。今ならまだ間に合う。お前達の故郷では、恋人がベッドを整頓して、お前達の帰りを待っているぞ』

帝国軍からの返答。

『俺は帝国軍上級大将のオフレッサーだ。我々の後方では、コック共がフリカッセを作る用意をしているぞ？貴様等の肉を使ったフリカッセが』

オフレッサー。

その名を聞いたシェーンコップは顔を少し歪めた。

彼の異名は同盟でも広く知られている。

“ミンチメーカー”

この銀河最強と言っても過言ではない陸戦の王者が、肉食獣と化して、今自分達に牙を剥こうとしている。

驍勇果敢を持って知られる薔薇の騎士と言えども、その名には冷や汗を流す物があった。

オフレッサー、及び陸戦隊長のリューネブルク准将に率いられた帝国軍が、無言の咆哮を上げながら、同盟軍を踏み潰さんと襲い掛かってきた。

戦闘開始から既に半日が経過し、善戦する同盟軍は帝国軍の突入を三度退けていた。

しかし、その微妙な戦局の拮抗も破れる時がくる。

『第65独立大隊より緊急連絡！敵軍の基地内Bブロックへの突入を許したとの事！同大隊は戦力の過半を失い戦闘続行は困難！』

「皆、聞いたか。行くで」

はやては部屋に集まった機動六課の隊員に言った。  
全員が装甲服を着用して、デバイスを構えている。  
はやては外の戦局を知らないが、基地にはるくに戦力が残っていない事を感じ取っていた。

基地が陥落すれば自分達にも戦火が降り掛かる。  
その前に敵を倒し、火の粉を払おう、と言うのである。

しかし彼女らは知らなかった。

突入した敵部隊は、オフレッサーが率いる、ラインハルトやキルヒアイスを含む精鋭であり、ベル力騎士の2人ならともかく、本当の“戦場”を知らない彼女らでは到底かなう相手ではなかった、と言うことを……………。

## 三つの赤 後編（前書き）

キャラ崩壊があります。

## 三つの赤 後編

Bブロックへとやって来た機動六課。

彼女らはスターズ分隊とライティング分隊に別れ、魔法による大火力で帝国軍を薙ぎ払う。

しかし、彼女らの前に“精鋭”が立ちはだかる。

（くっ、この男、強い）

シグナムが対峙しているのは、帝国軍上級大将オフレッサーである。

シグナムとオフレッサーは幾度もレヴァンティンとトマホークで打ち合うが、一方的にシグナムがパワー負けしていた。

シグナムは相手がまだ本気を出していないのを感じ取っていた。

「さて、楽しい勝負だったが、こちらも時間が惜しいのでな。そろそろ決着といこうか」

オフレッサーが笑った。

「そうか、ならばこちらも全力でいかせてもらおう。レヴァンテイン、カートリッジロード！」

シグナムの剣に魔力が収縮する。

「紫電一閃！」

シグナムは上段から振り下ろし、オフレッサーもトマホークを振り下ろす。

両者の中間地点で二本はぶつかり合い……………

バキイーン！

レヴァンテインが砕け散った。

「な、に……………」

陸戦で使われるトマホークは炭素クリスタルと言われる素材から

出来ており、この世界では最大の硬度を誇る素材から作られたトマホークは、金属製のレヴァンティンより強度が高かった。

さらにオフレッサーの怪力に耐えられるよう、彼専用のトマホークはとにかく強度を重視した一品である。

そんな物と打ち合っていたらデバイスの方が耐えられなくなるのはある意味当然の事とも言える。

一瞬だが茫然自失したシグナムにトマホークが振り下ろされる。

「はああああ！」

そこへフェイトが飛び込み、トマホークを切り払った。

フェイトは返す刀で鎌形のデバイス、バルディッシュを振るが、0・25Gの下、身軽なオフレッサーは後ろに飛んで避けた。

距離を開けたオフレッサーに対し、フェイトは床を滑るように飛行し、オフレッサーに飛び掛かった。

「甘い」

身を反らしてフェイトの突撃を避け、そのまま回転。

バランスを取ると同時に遠心力で加速したトマホークをフェイトの背中に叩き込んだ。

シグナムとの打ち合いで損傷していたトマホークの刃は、装甲服を砕き、BJを切り裂いてフェイトの背中を右肩から左脇腹へかけ

て深くえぐった。

「っ！キサマあああああ！」

シグナムが折れた剣を手に飛び掛かる。

しかし、折れた刃は装甲服に僅かにしか突き刺さらず、かえって抜けなくなり、致命的な隙を作り出した。

「死ね」

横薙ぎに払われたトマホークは装甲服を破壊し、シグナムの身体を右肺あたりまで切り裂いた。

後数センチ深く刺さっていれば、心臓が裂かれ、致命傷となっていただろう。

「かつ、がはっ……………」

シグナムは吐血しながらその場に倒れ込んだ。

「次は……………貴様らか」

意識を失ったシグナムの身体からトマホークを抜き、エリオとキヤロの方へ向ける。

「あ・・・・・・・・・・あ・・・・・・・・・・」

「フェイト隊長・・・・・・・・シグナム副隊長・・・・・・・・・・  
・・」

2人は人間の持つ最大の欲望に身を預けた。

すなわち、“生存本能”。

「うあああああ！」

2人は逃げ出した。

基地の外でも戦闘は続いていた。

オフレッサーの基地内突入の報告を受けた“薔薇の騎士”連隊は

即座に基地へ引き返す事を決定した。

現在の同盟軍の陸戦隊で、もしオフレッサー達に対抗出来る者がいるとしたらそれは自分達だけだ。

たった1人の存在が戦局を変えかねない程の“異常”それがオフレッサーだからだ。

基地内のある十字路で、目に見える範囲の敵を追い払ったはやて達は、新たな強敵に向かい合っていた。

ラインハルト、キルヒアイスの2人である。

現在は、はやて、なのは、ティアナが弾幕を張ってキルヒアイスを押さえ込み、ヴィータ、スバルがラインハルトと戦っている。

彼女らは数の差で2人を相手に有利に戦いを進めていた。

『助けて!』

『殺される!』

はやて達にエリオ、キャロの2人から念話が届いた。

『どうしたんや! シグナム達は?』

『皆……皆、やられちゃった……次は私達……』

『なんやて! ……分かった、今いくで!』

『来ないで……死にたくないよ……死ぬのはいやだ……ヒツ、うあああああああ! ……!』

『あかん、2人とも落ち着くんや!』

明らかな“異常”を知ったはやては、ヴィータにこの場を任せ、  
なのはを連れて2人の下へと急行した。

急行したはやてとなのはが見たのは、血の海に沈むエリオ、キャロ。そして血に塗れて真っ赤に染まったトマホークを持つオフレッサーの姿だった。

はやてとユニゾンしているリインが、2人がまだ生きている事を伝えてくれ、安堵の息をつく。

そして同時に仲間を傷付けられた事への怒りが湧き出す。

はやてが詠唱を始め、足元に魔方陣が浮かび上がる

「響け、終焉の笛！」

なにやら危険な気配を嗅ぎとったオフレッサーがはやてへ突進する。

「させない！」

なのはが両者の間に割り込んだ。

振り下ろされるトマホークに対し、プロテクションで防ごうとするが、一撃で破壊される。

一撃を防がれたオフレッサーは一瞬驚いたが、直ぐに突きを放つ。

トマホークの両刃、その先端が装甲に刺さり、柄が直撃する衝撃のままはやての方へ吹き飛ばす。

「なのは!？」

はやてが驚愕しながらもなのはを受け止めようとするが、再び距離を詰めてきたオフレッサーへの対処が先と、デバイスを向ける。

「ラグナロク！」

オフレッサーは至近距離で放たれた砲撃をトマホークで防ぐ。

衝撃に耐えきれず柄が折れたトマホークを捨て、腰から長大な戦闘ナイフを抜き取ってはやてに迫る。

「くっ！」

プロテクションも間に合わず、咄嗟に両腕を交差させる。

腕に深い切り傷が走り、デバイスを落とす。

続く蹴りではやては壁に叩き付けられ、意識を手放した。

はやてを片付けたオフレッサーは、そのままなのはに止めを差そうとするが、彼の下に陸戦指揮官のリューネブルクから通信が入っ

た。

『オフレッサー閣下、第4惑星軌道上に、接近してくる同盟軍の艦隊を発見しました。については、総司令部より戦闘中止命令です』

『分かった』

オフレッサーは短く通信を切ると、なのはに改めて止めを差そうとするが、新たな乱入者が現れた。

通路を埋め尽くす同盟軍の陸戦隊、いずれも“薔薇の騎士”連隊のマークを着けている。

「こいつらの対処が先だな」

オフレッサーはナイフを構えると、基地からの脱出も兼ねて、薔薇の騎士達との戦いに望んだ。

### 三つの赤 終決（前書き）

救いは・・・一応あります。（多分）

## 三つの赤 終決

帝国軍10万の攻勢は終わった。

第4惑星軌道上に同盟軍第5艦隊が現れたからだ。

薔薇の騎士連隊は、その名に恥じない獅子奮迅の働きを見せた。

デア・デッケンを始めとし、数多くの戦死者をだしたが、オフレッサー、リユーネブルクといった歴戦の勇士や彼等に率いられた兵を押さえながら、他の部隊の救援にまで回った。

まさに屍山血河と言ったところだが、なんとか勝利は手にする事が出来た。

今頃軍医は過労と戦っているころだろう。

薔薇の騎士連隊の宿舎で彼女らは目を覚ました。

「知らない天井やな」

身体を起こそうとするが身体中に激痛が走って起きられない。

「目が覚めたか」

「ヴァーンシャツフェ大佐？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・!!」

はやては自分が気を失う前の事を思いだし、痛みに耐えて身体を起こした。

「皆は！？無事なんか！？」

「安心しろ、少なくとも死んではない」

「そうか・・・・・・・・・・」

「良かったな。あの“ミンチメーカー”相手にして、生きて帰っただけでも奇跡のような物だ」

因みに、機動六課の主な被害は、

はやて、肋骨を骨折、両腕の切り傷。

なのは、ヴィータが打撲、切り傷。

シグナム、以下FW陣は身体を深く挟まれ重傷。

シグナムは治療の段階で右肺を摘出された。

そして、最も傷が深いフェイトは……………。

「隊長……………」

ベッドの上でフェイトが、意識の無い身体を横たわらせている。

フェイトは背骨や内臓を大きく損傷し、下半身不随に陥っていた。

まだミッドチルダや、同盟、帝国の大病院なら治療の方法はあるだろうが、野戦病院では応急処置が限界だ。

「それで、君達の処遇だが……………騎士にならないか？」

「……………え？」

「いつまでも隠し通す訳にもいかん。君達には暫定的に“薔薇の

騎士”連隊のメンバーとして振る舞ってもらいたい」

はやては、この“軍人にならないか？”の誘いに、反射的に断りそうになったが、よく考えれば、この世界は時空管理局を知らず、その法も適用されない。

それに、この世界は戦争中らしく、自分達だけのロストログリア探索はほぼ不可能だと言っても良い。

現在の機動六課で重傷を負っておらず、まともに戦えるのは、なのはとヴィータだけなのだ。

ならば、少なくとも信用できる人達と一緒にいるほうが安全である。

自分達は未だに母艦のアースラとも連絡を取れていないのだ。

「解りました、暫定的に振る舞わせて頂きます」

はやての答えにヴァーンシャツフェは面白そうな顔をし、

「シェーンコップの奴と気が合いそうだな」

「そうですか、宜しく願います、連隊長」

「ああ、私は連隊長では無いぞ。今回の陸戦で恐らく私は准将に昇進だからな、これを機に前線から離れるさ。だからシェーンコップが新しい隊長だ」

そう言ってヴァーンシャツフェは左腕を見せた。

その腕は肘から先が無かった。

「不覚をとった。この身体ではもう陸戦はできんよ」

はやては息を飲んでいた。

肘から先が無い腕を見ながら、はやては、この世界は戦争が日常的な事、今まで如何に自分達が生ぬるい場所に身を置いていたかを悟った。

（これが“戦争”なんやな。これに比べたら管理局の仕事がお遊戯に見えるわ、私らはいつの間にか、“井の中の蛙”になっとったんやな………）

「………君が何を悟ったのかは大体解るが、その認識は甘いと思うぞ?」

「どういう事ですか?」

否定されたはやてはやや強い語調で聞いた。

「付いてこい………おい、リンツ大尉。車椅子を押してやれ」

はやてを気遣ったヴァーンシャッフエがリンツ大尉を呼び、車椅子を用意させた。

同時にこれははやてが逃げられないようにするためでもある。

数分後、まだ片付けられていない死体の山になっている戦場後を見せられたはやては、胃液を吐き出しながら、リンツに背中を擦られながら、自分の認識は確かに甘かった事を知った。

三つの赤 完

新生“薔薇の騎士”小隊（前書き）

ご意見等いつでもお待ちしております。

## 新生“薔薇の騎士”小隊

“薔薇の騎士”連隊に所属を決めたはやて。

彼女は今から機動六課のメンバーにそれを伝える所である。

あの戦いから既に4日が経過し、メンバーは全員目を覚ましていた。

フェイトは車椅子に乗っているが、本人は傷のせいで身体が動かないのだと思っており、真実はまだ軍医と連隊幹部、はやてのみ知っている。

防諜の為、として特別に部屋を貸してもらい、そこにメンバー全員を集めた。

「皆集まったな、今日集まってもろたんは……………」

「これからどうするか、だよね？」  
「なのは言った。」

「とにかく、アースラと連絡を取る、これは決定事項や。今から話すんは、それまでどうすんか、って事なんや」

「主がそう言うからには、何かしらの考えがあるのか？」

シグナムが相づちを入れる。

「そうや、私たちは暫定的に薔薇の騎士連隊のメンバーとして動く」

最初に再起動したのはなのはだ。

「えっ、つまり私達は軍人になる、って事？」

「そうや、ヴァーンシャツフェさんが私たちの身分証明書を作ってくれるらしいで」

シグナムとヴィータは、はやての言葉から大体の事情を察したのだろう、何も言わなかった。

2人とも、今の所、軍の協力無しでは何も出来ない事を理解していた。

今回の陸戦は、狭い通路内で砲撃魔法を撃てたから敵の戦力を大部分削る事が出来たが、野戦になれば、数の暴力を振るえる軍隊には敵わない。

第一自分達にはこの星からの移動手段がない。

F W陣はただただ話しについていけないだけだった。

「私は反対だよ！私達は管理局員として行動すべきだよ！」

「なのは、なら具体的にどうすんか言うてみい」

「ロストロギアを探す。探して封印する」

「今、この世界は戦争中や。もし軍隊が立ちはだかったらどうすんや」

「大丈夫、ちゃんと話せばきっとわかってくれるよ！」

「私らの話を信用してくれると思うか？」

「でも！やってみなくちゃ解んないよ！」

「じゃあ、信用してくれんで、攻撃してきたら？」

「その時は、戦うよ……………」

「論外やな、絶対勝てんわ」

「でも、私達には魔法が「やかましい」え？」

「なのは、私の方針に意地だけで反対すんなら、……」  
・機動六課を出ていけ」

「はやてちゃん!？」

「私は部隊長や。私の命令が不服なら出ていけ。止めはしない」

「そんな……………」

「魔法は万能や無い。現に私ら全員非魔導士の部隊にやられとる。しかもたった3人。この上軍隊に出て来られたら、もうどうしようも無いわ」

なのはにとって、魔法は人を守る為の力である。

そして、なのはには次元世界の平和を守る管理局員としての、魔導士としての誇りがある。

やはり、戦争に魔法を使う事に納得出来ないし、そんな事を言うはやてを理解出来ない。

思わぬ方向から援護射撃が来た。

「私は、はやて部隊長の案に賛成です」  
ティアナだった。

「どうせ、私達には行く当てがありません。だったら、このまま此処に残るのも一つの方法だと思います」

「ティアナ!？……………シグナムさん!ヴィータちゃ

ん！2人も何か言つてよ！」

なのはも援護射撃を求めたが、

「悪いが、私も賛成だ。．．．．．それから、これは個人的な理由だが、私はあの“ミンチメーカー”と呼ばれる男と再戦したい。騎士として、負けたままでは引き下がれない」

「あたしは、シグナムと似たような理由だが、．．．．．楽しんだよな、久しぶりに感じた、本物の“殺し合い”の、“戦場”の空気が。．．．．．なんかこう、血が騒ぐって言つか」

「なのは、どうすんや。この場で決めや」

なのはは、しばらく押し黙っていたが、やがて、

「．．．．．解つたよ」

と、納得も理解もしていないのが良く解る顔で言った。

「話しは終わったかな？」

ドアがノックされ、シェーンコップが書類と共に入って来た。

「君達の身分証明書だ」

とシェーンコップが一枚ずつ書類を手渡す。

以下、階級を示す。

はやて・・・中尉、小隊長。

なのは・・・少尉、第1分隊長（FW陣）。

フェイト・・・少尉、小隊幹部。

シグナム・・・少尉、第2分隊長。

ヴィータ・・・曹長、第1分隊副隊長。

FW陣・・・軍属、第1分隊所属。

リン・・・階級無し、人間では無いから。

（そもそも存在をシェーンコップは知らない）

「あの、シェーンコップ隊長？」

「何かな？ヤガミ“中尉”？」

「身分証明書って、こんなに簡単に作れる物なんですか？」

「会戦の直後と、新兵の卒業時期は、人事部は大忙しでな。多少変な書類が混じってたってわかりやしないさ」

「はあ、後は……この書類を見ると、“第3分隊”もあるらしいですが、誰が隊長を？」

「次の新兵補充の時に、第2分隊の分もあわせて人員を送る。今は空席だ」

「了解しました、シェーンコップ“大佐”」

新生“薔薇の騎士”小隊  
完



## 接触（前書き）

やっとあの人達を登場させられました。

これからもちよくちよく登場する予定です。

## 接触

ヴァンフリート星域会戦後、陸戦の結果廃棄処分が決定された基地に、数々の輸送船が降り立った。

その中の一隻、強襲揚陸艦イストリア。

この艦は“薔薇の騎士”連隊専用の艦であり、隊員はこれでこの星を離れ、一旦同盟首都、惑星ハインセンに向かう。

「おお。やっぱり宇宙は綺麗だな」

衛星の重力を軽く振り切った輸送船団はまず会戦から帰還する同盟軍艦隊と合流、ハインセンへと向かう。

万を遥かに上回る大艦隊を見たはやて達は、

「凄い数だな、次元航行艦やか目じゃないな」

「・・・・・・・・何あれ」

「確かに戦って勝てる相手じゃないね・・・・・・・・」

上から順番に、はやて、なのは、フェイトである。

『イストリア艦長より通達、これよりワープを行う』

「ワープ？そんな物があるんか」  
はやてはやや目を煌めかせて言った。

ワープは、亜空間跳躍航法の事である。

一度にワープできる距離が決まっているので、ワープと通常航法を繰り返しながら艦は長距離を航行する。

艦隊はワープを幾度か繰り返し、順調にハイネセンへと航行していたが、2日目に異変は起こった。

イストリアがワープしようとした直前、突然座標特定の為の計器が狂い、この艦のみ本隊から数十光年離れた、帝国との国境付近の無人の恒星系に跳んできてしまった。

「どうした、艦長？」

シェーンコップが尋ね、艦長から調査結果を聞く。

「……………そうか、解った。至急交換しろ……………シェーンコップ中佐、ただ計器の部品が磨耗していただけのようです」

「そうか、なら直ぐに復旧できるな」

「はい、１０分あれば」

シェーンコップも、艦長も、特に問題無く本隊に合流出来ると思  
っていた。

が、

「前方の空間に歪みが発生！ワープ・アウトのようです！」

「いかん、急速後退せよ！時空震に巻き込まれる！」

イストリアのエンジンが目一杯働き、艦を後退させる。

「なんだ、あの艦は・・・」

そこには、彼らの記憶には存在しない艦型の、一隻の艦が浮か  
んでいた。

「さて、どうしようかしら」

次元航行艦アースラの艦橋でリンディ・ハラウンが呟いた。

何とかしてはやて達と連絡を付けようと、通常空間に出てきたは良いものの、いきなり艦に出会うとは思っていなかった。

しかもあの艦から10個の魔力反応がある。

現時点ではあの艦にあの子達が乗っている可能性が高い。

もしあの艦のクルーがはやて達に危害を加える存在ならば排除しなくてはならない。

「エイミィ！あの艦と通信回線を開ける？」

『こちらは、時空管理局所属の次元航行艦アースラ、私は艦長のリンディ・ハラウンです』

イストリアの艦橋では、開かれた通信回線、そこに映った艦長と名乗る若い女性、聞き慣れない単語に艦橋が動揺するが、シェーンコップは少し違った。

（ハラオウン？どこかで聞いた事があるような……）

と、横にいたリンツ少佐に聞いてみた。

「ああ、あのフェイトとか言う金髪の女の子ですよ。確かあの子の姓もハラオウンだったはず」

因みに、計器の部品交換の事は全艦に伝わっており、隊員達はいつも通り暇潰しをしていた。

はやて達も自分達の船室に戻ってゲームに興じていたため、アイスラには気付いていない。

リンツは暇潰しにシェーンコップを酒に誘おうと艦橋に入った結果、面倒事に巻き込まれたのだ。

『私達は人を探しています。今から挙げる名前に聞き覚えはありますか？』

全員。

シェーンコップは全員の名前を覚えている訳ではないが、それでも知っている名前は全員が挙げられた。

（まあ、こいつらに教えてやる義務も義理も無いがな……）

「誠に残念ながら、貴官の質問には答えられない」

『何故でしょう？』

「貴官らを信用するに足る証拠が無いからだ」

『確かに、信用させるための証拠はありませんね。しかし、認めさせるための証拠はありますよ』

「ほう？」

『その艦から反応があります。今挙げたメンバーは全員その艦に乗っていますね？』

発信器の類いか？

シェーンコップはそう思い、どうせバレているのならそれを逆手にとってやろう、と考えた。

「……………おやおや、そこまで解っているのなら仕方がない。認めま

「左舷、10時方向に未確認の艦影確認！約1時間後に接触の予定！」

オペレーターの叫びが艦橋を満たす。

「ちっ、艦長！直ぐに撤退しろ！」

『……………？何かあったのですか？』

「残念ながら、お話はここまで。敵が来たので逃げさせてもらう」

『えっ！？ちよつと待っ

リンディが言い終わる前に、復旧を果たしていたイストリアはさっさとワープしていた。

「さて、あの“時空管理局”とやらとどういう繋がりがあるのか、きっちり話して貰わなければな」

接触 完



## 尋問（前書き）

おかしな点等、ありましたら是非作者までご一報を。

今更ながら、作者は“なのは”の事を二次創作でしか知りません。

## 尋問

惑星ハイネセン。

バーラト星系の第4惑星であり、自由惑星同盟の首都ハイネセンポリスがある惑星である。

ハイネセンの周りには、“アルデミンス処女神首飾り”と呼ばれる12個の迎撃衛星があり、その高い性能故に難攻不落とも言われる。

そのハイネセンの地に降り立ったはやて達は、まずシェーンコップにホテルへと案内された後、自由時間となった。

が、

「はやて、聞きたい事がある。付いて来い」

シェーンコップにはやては連れ出された。

因みにはやてはシェーンコップに、名前で読んでくれるよう頼みである。

そっちの方が呼ばれ慣れているからだ。  
なのは、フェイト、FW陣も同様。

シェーンコップにも別に断る理由が無かったのでプライベートではそう呼んでいる。

シェーンコップとはやては薄暗い路地を歩いていた。

時折すれ違う男達のはやてに下品な視線を送るが、そのたびにシェーンコップがひと睨みして黙らせていた。

やがてシェーンコップは一軒の古い居酒屋に入り、店主に合図を送る。

店主は頷くと、奥の部屋を貸してくれた。

この店主はシェーンコップと顔見知りであり、シェーンコップはこの店をよく密談に使用していた。

部屋にはテーブルと2つの椅子がある。

「さて、こんな場所に呼び出した理由だが・・・」

「何ですか？」

「2週間程前、イストリアが計器の故障で間違った場所にワープしてしまった時の事だ。そこで俺達は一隻の艦に会った。そしてそ

の艦は『アースラ』と名乗った」

「本当ですか!？」

「そこでだ。お前達とあの『アースラ』、及び“時空管理局”とやらにはどういう繋がりがある？」

「それは……………」

はやては口ごもった。

今更ながら、本来管理外世界での魔法行使は禁止されている。勿論魔法について教える事も。

シェーンコップは魔法の事を知らない。

以前の戦場では、薔薇の騎士連隊が基地内にたどり着いた時にはもうはやて達は倒れていた。

しかし、はやてはその事を知らず、てっきり魔法行使を見られた、と思ってしまった。

だったら、今更隠したところで意味は無い。

第1、自分達は魔法がなければ何も出来ないのだ。であれば、何時かは話さなくてはならない。

（仕方ないな、管理局法には違反するけど、疑いを解くには全部喋るしかなさそうや。……………第1いかんのは管理局や! あらかじめ情報くらいくれたらええのに。あんな戦場に放り出さ

れるなんて聞いてないで！)

はやては一息ついてから喋りだした。

「まず、この世には多数の独立した世界があつて、それらを私達は次元世界と呼んでいます。時空管理局は次元世界を文字通り管理する組織です」

「ふむ、まあ根本的な疑問は置いておこう。それで、今俺達の居るこの世界も、時空管理局とやらに管理されているのかな？」

「いいえ、この世界は最近新たに発見された世界で、まだ本格的な調査隊は派遣されていません」

「では何故お前達がいる？」

「この世界で、かつて存在した世界の先進文明の遺産“ロストロギア”らしき物が発見されて、その確保、封印の為に私達が派遣されました」

「明らかに子供が大半を占める少数部隊をか？」

「その事で、話さなくてはならない事があります。……私達が元居た、“第1管理世界”ミッドチルダには、進んだ科学技術の結晶として、“魔法”が存在します」

「魔法、ときたか」

「時空管理局は魔法が使える人間、“魔導士”を主戦力としていて、世界各地で魔導士の才能ある者をスカウトしています。あの子

達はそうやって管理局に入局しました」

「成る程、そこまでしてかき集める程なら、さぞかし魔法は強力なのだろうな」

「はい。エース級の魔導士ならば、単独で街1つ焼き払えます」

流石にシェーンコップもこれ程とは思っていなかったらしい。

「たしかに、それだけの戦力ならば血眼になってスカウトするの  
も分かる。……しかし、管理局は年端もゆかぬ子供  
を戦場に送り出す事に躊躇はないのか？」

「無いでしょう。私達は魔法を行使する際にデバイスと呼ばれる  
補助道具を使いますが、このデバイスには魔法を放つ際に自動的に  
人体へのダメージをほぼゼロにする“非殺傷設定”と言うものがあ  
ります。これのおかげで、いくら強力な魔法を放とうと、喰らった  
相手は意識を失うだけなのです」

「誰も死なない戦場か。それでは確かに躊躇は無いだろうな」

「後、魔法の実力は個人の資質に大きく依存するので、魔導士は  
非魔導士に対して選民思想が蔓延っています」

「誰も傷付かない故に、己の力の大きさも解らずに暴力を振るう  
子供か、いや、そんな子供が育つのなら大人もきつと同類なんだろ  
うな。まあ、管理局なんて偉そうな名前をつける位だ、中身もそん  
な物だろう」

「私達も知らず知らずの内にそういった思想に毒されていました。

魔法は万能やと、心のどっかで信じていて、戦いに挑んだら、非魔導士の部隊に私達は壊滅させられた」

「オフレッサーか。奴は化け物だからな」

「私達はいつの間にか周りを見下していました。なにがエース・オブ・エースだ、なにが少数精鋭だ、私達は全く歯が立たなかった。助けを求める幼い仲間さえ助けてやれなかった。それが、そんな無力な自分が悔しい」

「・・・・・・・・・・」

「だから私は、一時管理局を離れてでもこの世界で居たい。そうしたら、なんか学べそうだから、強くなれそうだから」

「学べそう、か。面白い事を言う。・・・・・・・・気に入った。お前を、いや、ヤガミ中尉を我が“薔薇の騎士”連隊の幹部として迎えよう」

「よろしく願います」

「そうと決まったら早速訓練だな。お前達が戦場で生き延びられるよう、きっちり鍛え直してやる」

シェーンコップはにやり、とサディスティックな笑みを浮かべた。

「え」

「まあ、死に掛ける覚悟くらいはしておけ。こちらら、天下の薔薇の騎士なんだからな」

「・・・・・・」

はやて達の苦難はまだ、始まつたばかりである。

尋問 完

隊員達の休日（？）（前書き）

やっと原作キャラ登場。

## 隊員達の休日(?)

惑星ハイネセン、昼どきの首都ハイネセンポリス。

ミッドチルダと同等、もしくはそれ以上に発達しているかもしれない美しい街並みに、私服姿のスバルとティアナがいた。

「傷は大丈夫？ティアナ」

「それは私の台詞ね。スバルこそ大丈夫なの？」

「痛み止めも飲んだし、平気だよ」

スバルは以前の戦いで、キルヒアイスに突撃を敢行したあげく、攻撃を回避されて叩き切られていた。

ティアナは前衛を失った結果、簡単に迎撃を掻い潜られ、一撃を入れた。

「強かったね、あの人」

「ええ、確かに。よく考えてみれば、魔法の身体強化無しで隊長達の弾幕を避けてたよね」

この場にはいないキルヒアイスからしてみれば、飛び交うビームや亜光速のミサイル、それどころか亜音速の実弾銃と比べても、目で追えるレベルの魔力弾が遅すぎるのだ。

別に自分じゃ無くても、ある程度戦場慣れた兵士ならば避けられるだろう、と思う。

そんな事露程も解らない2人からすれば、ヴィータと一対一で渡り合ったラインハルト、自分達を斬り伏せたキルヒアイスはエース・オブ・エースに見えるだろう。

実際2人は帝国軍でも相当な強者なのだが。

やや陰を落としながら2人は街を歩いていた。

そうして歩いていた、ある時。

ドン！

スバルが人にぶつかった。

ぶつかったのは子供づれの1人の男性だった。

「あ！すいません！」

「いや、考え事をしていた私も悪かった。済まない」

まだ駆け出しの助教授にも見える青年は頭を掻きながら謝った。

自由惑星同盟軍大佐、ヤン・ウェンリーは、養子であるユリアン・ミンツを連れ昼食に来ていた。

ヤンには悩みがある。

同盟軍は再び大軍を投入してイゼルローン要塞を攻める。

帝国との事実上の国境線であるあの要塞は、超硬度鋼と結晶繊維、スパー・セラミックの四重複合装甲を持つ、この宇宙で最も堅牢な要塞だった。

それを攻略するべく、この度6回目の大軍を派遣するが、戦法は対して変わらず、力攻め。

（全く、あの要塞が力攻めでは落ちない、という事が何故解らない？）

そうして考え事をしながら歩いていたのが悪かったのだろっ、ヤンは人にぶつかった。

「あ！すいません！」

「いや、考え事をしていた私も悪かった。済まない」

ぶつかったのは若い少女だった。

「・・・ヤン大佐、前ぐらいちゃんと見て歩いて下さい」

ユリアンが呆れながら言った。

「ほら、キャゼル又さんを待たせていますよ」

ヤンはちらり、と背後を見た。

「お、そうだった。・・・そうだ、君達、昼食はもう食べたかい？」

「いえ、未だですが・・・」

「良かったら、一緒に来ないかい？キャゼル又家の皆も君達のような子が沢山来てくれるのは喜んでくれるだろう」

「え、いや、私達は「良いんですか！？」スバル！」

「別に構わないと思うよ。そう思うだろう？ユリアン、キャゼル又准将？」

「その通りだ」

ユリアンの物では無い、男の声が聞こえた。

「あ・・・キャゼル又准将」

アレックス・キャゼル又がそこにいた。

「ヤン、お前があんまりに待たせるから探しに来てやったぞ」

「本当は今仕事が終わったばかりの人が何を言ってるんです？」

「それはお互い様だろう。・・・で、昼食だが、別に何人来たって構わん。妻も料理のしがいがあると言っていた」

「・・・・・・何時から私達の話聴いていたんです？」

「最初からだ。って、お前知ってて言ってるだろう」

「はい」

ヤンは素直に白状してやった。

「変な所で妙にやる奴だからな」

「ははは・・・」

「と言っわけで、4人追加だな」

「4？」

「こつこつ事だ」

そう言つてキャゼルヌが手招きする。

「どうも、“薔薇の騎士”連隊第13代連隊長、シェーンコップです。こちらは部下の1人・・・」

「八神はやてと言います、以後よろしく！」

この2人は例の密談後、特に何もせず街を歩いていたが、スバルとティアナの姿を見つけ、声を掛けようとしたところを、知り合いであると感じ取ったキャゼルヌに手招きされたのである。

キャゼルヌ家で用意されたビーフシチューは、絶品であると言つて反対意見が全く出ない程の素晴らしい物だった。

「おかわり！」

「こら、スバル！ちよつとは自重しなさい！」

スバルが、この体の何処に入るのだ？と思うほどの食欲を見せ、

ティアナがそれを諫めようとし、

「お願いします！」

はやてが料理を教えてもらいに、製作者のキャゼル又夫人に弟子入りを懇願していた。

一方、ヤンは

「“薔薇の騎士”連隊、か」  
シェーンコップ達の事が深く印象に残っていた。

流石にこれだけ賑やかに騒いでくれたら（シェーンコップ以外）  
ヤンの記憶にも焼き付いた。

隊員達の休日（？） 完

## 訓練風景（前）（前書き）

内容は作者のオリジナルです。

## 訓練風景（前）

はやて達は、シェーンコップに言われていた訓練に参加するべく、惑星ハイネセンのあるバーラト星系から少し離れた陸戦訓練所に来ていた。

車椅子のフェイト、子供という事で訓練から外されたエリオとキヤロを除いた全員が軍服である。

ちなみに当初はヴィータも除外対象だったが、子供扱いされた事に怒り出したヴィータは、無理矢理訓練に参加している。

訓練所に集まった薔薇の騎士連隊、約1000名程の歴戦の勇士と、新たに補充されたほぼ同数の新兵。

壇上に上がった連隊長のシェーンコップがマイクを手にした。

「それでは、訓練を始める。まずは体力作りからだな、ランニングをやるから、ついてこい」

この訓練所の外周はマラソン用のコースになっており、各種坂道、森林、砂地、岩肌等を通る約10キロ程のコースである。

各々準備体操を終えた訓練着の兵士が次々とスタートラインに着く。

「では、行こうか」

シェーンコップが駆け出した。

先頭を切ったシェーンコップ、その後にくるリンツ、ブルームハルト、更に続く兵士達、はやて達。

スタート後、約3キロ。

最初の大小上下左右の坂道地獄を抜けた先、うつすらと生い茂る草花の道を走っていたのははやて達。

配属される以前から訓練を受けていた新兵達はまだ平気な顔をしている者が多いが、はやて達は一部を除き付いていくのがやっとだったりする。

「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ」

自他共に認める運動音痴、なのは。

もうフラフラである。

「くっ、まさか、これ、ほどっ、とは」

肺活量が健全時の約半分しかないシグナムも苦しそうにしている。

スタート後、約4キロ。

「はあ、はあ、はあ、にやあゝ、もう、限、界」

なのはが倒れた。

「あかん、あかん、わたし、は、絶対、あきら、めん、で」

「・・・・・・・・」

はやて、ティアナも苦しそうにしている。

ティアナに至っては口を開く余力も無い。

「はやて？シグナム？もうへばったのか？」

「隊長、ちょっと、情けない、です」

平然と走り続けるヴィータ、やや苦しそうだがペースを乱していないスバル。

何故はやて達に体力が無いのか、それは普段から魔力による身体強化や空中戦ばかりして、ベルカ騎士のように近接戦闘を想定して身体を鍛えていないからである。

ミッドチルダ式の魔法は、射撃・砲撃を中心としており、魔導士自体は身体能力より魔力保有量、射撃のセンスが求められる。

故に、普段から射撃やコンビネーションの訓練ばかりで体力作りを余りしてこなかったはやて達は簡単にへばった。

スタート後、約5キロ。

「あかん、みんな、あとは、たの、む、わ」

部下への見栄だけで頑張ってきたはやてもリタイア。

「ごめん、なさい・・・」

ティアナがギブアップ。

スタート後、約6キロ。

コースは森林、平原といった所から砂地へと変わり、足で地面を

蹴る度より一層体力を奪われる。

この頃から薔薇の騎士連隊のメンバー、主に新兵にも離脱者が現れ始めた。

ここにも1人。

「くつ、わたしと、した、ことが、・・・すまない」  
シグナム離脱。

片肺で此処まで走ったのだからこれは凄い。

スタート後、約7キロ。

「すみません、・・・限、界」

スバルが力尽きた。

「つて、気が付きや、あたし1人かよ」

いまだにペースを乱していないヴィータ。

スタート後、約8キロ。

マラソンコースの地面が、砂地から舗装用セラミックへと変わった。

流石のヴィータもかなり苦しそうだ。

スタート後、約9キロ。

「ようし、あと、1キロ、・・・ラストスパアート！」

ヴィータは全力疾走を始めた。

その彼女に抜かれた新兵、今追われている新兵等は、

（あんな子供に・・・）

彼等は一斉にラストスパートをかけた。

ゴール地点でもある訓練所の正門を潜ったヴィータは、軽く一休み入れた後、念話で位置を知ったはやて達が居る休憩所の1つに向かった。

そこへ、

「今お帰りかな？」

シェーンコップだった。

シェーンコップ、リンツ、ブルームハルト等を含む一部の最古参の隊員はさっさとゴールし、新兵の帰りを待つ間にシャワーを浴びて汗を流し、リタイアした連中を回収していた。

「・・・なんか、腹立たしい聞き方だな、大佐」

ヴィータの言葉通り、シェーンコップはかなりサディスティックな笑みで聞いていた。

「いや、此处まで予想通りの結果になるとは思っていなくてね」

「予想通り？」

「1人完走出来たら上々。おかげで小金も入ったしな。これは差し入れだ」

はやて達が何人完走出来るか、でリンツ達と賭けをしていたシェーンコップはヴィータのおかげで小金持ちになっていた。

差し入れ、というか隊員全員に配給したスポーツドリンクを人数分入れた箱を休憩所まで運んだシェーンコップは最後に、

「これで“準備体操”は終了だ。30分後に訓練開始だと伝えておいてくれ」

と言って廊下の奥へ消えた。

休憩所のドアを開けたヴィータは、全員にスポーツドリンクを渡して自分もソファアーに座った。

「いやゝ、流石本物の軍人やなあ。キツイ訓練やわ」

はやてがやや嬉しそうに言った。

「まあ、10キロだしね。私も余り自信無いかも」

訓練に参加していないフェイトが労う。

「つかれたよ……」

「私もです……」

なのはとティアナが突っ伏している。

「騎士の鍛練は、やはり苦しいものでなければな。苦しみに耐えてこそ成長がある。……完走出来なかった私が言うのもなんだがな」

シグナムが過去を思い出すようにしみじみと。

「で、訓練はもう終わりなんですか？」

スバルが聞いた。

聞かれたヴィータは、やや口ごもりながら、

「いや、それが……この連隊では今のマラソンは“準備体操”らしい。30分後に訓練を開始するって」

爆弾を投下した。

「にやあああ！？まだやるのー！？」

「ってか、いま訓練“開始”って言いませんでした？」

「うむ、そうこなくてはな」

「あれが準備体操で、普段どんな訓練しとんねん、シェーンコッブ大佐」

休憩所内のメンバーが、三者三様のリアクションを示した。

訓練風景（前） 続

## 訓練風景（後）（前書き）

持論を入れてみました。

## 訓練風景（後）

開始された訓練。

まずはやて達は筋トレをさせられた。

腕立て、腹筋、背筋、スクワット、いずれも回数は100回。

最古参の隊員はもとより、新兵達でさえ普通にこなす訓練メニューだが、はやて達はこの時点で身体が動かなくなった。  
第一こなせていない。

それを見ていたとある隊員がシェーンコップに彼女らの現状を伝えたとこ、

「そら見る、やはり誰もこなせなかった。さ、これは俺の物だな」  
「ちつ、また隊長の1人勝ちですか。まったく、こんな初歩的な訓練メニューも出来ないとは、根性の無い。小官の生活費はだいぶ削れました」

シェーンコップと複数の隊員がまた賭けをしていた。  
今度は筋トレをはやて達が何人こなせれるか、らしい。

シェーンコップはその隊員達から金を受け取りながら言った。

「さあ、仮にもお前達の隊長となるお方だ。あのくたばってるお姫様全員を部屋に送って差し上げる」

「はあ、あの華奢な少女が隊長ですか、先が思いやられそうです」

腹筋100回でつくにのびていたはやては、自分の身体が誰かに担ぎ上げられるを感じた。

最初はシェーンコップ大佐かと思ったが、見える屈強な筋肉は光沢のあるチヨコレート色をした皮膚に覆われていた。

「うっ、誰や？」

「まだ口が聞ける体力が残ってましたか」

「違う、これは、絞り出っしょんや」

「自己紹介がまだでしたね。この度第3分隊隊長として貴女の部下になる、軍曹のルイ・マシユンゴです」

「そうなんか、よろしくな、それから、私の事は“はやて”でかまんきんな」

はやて達の小隊に配属された隊員は19名。

実質彼らを纏めあげる役目のマシユンゴ。

「本当に大丈夫なんですかね？この小隊は」

彼の呟きはいずれ現実になるかもしれない。

それから、素手の組手、訓練用トマホークを用いた白兵戦の訓練、装甲車の運転、各種兵器の取り扱い等を連日やらされたはやて達。

訓練を監督したシェーンコップ曰く、

「シグナム、ヴィータ、スバルは白兵戦が得意そうだな。ティアナは射撃はそこそこ出来るが、それ以上に指揮官の素質がありそうだ。はやても中々頭が回る。最後になのはだが……正直、向いてないんじゃないか？」

シェーンコップはまだ魔法に頼ろうとするのはに気付いていた。  
しかしシェーンコップが考えるに魔法は弱い。

はやてから軽く魔法を見せて貰った事があるが、魔力弾よりのビームや実弾の方が早い。

砲撃を行いたいならミサイルがあるし、高出力のビーム砲やレール・キャノンもある。

空戦なら生身の人間では大した速度は出せない。  
いくら魔法で強化しても音速は越えられないだろうし、この世界では航空機どころか、宇宙艦でさえ音速の何十、何百倍の速度で航行する。

魔法は別に大した事は無いのだ。

魔導士が魔法を発動させるより此方がブラスターの引き金を引く方が早い。

なのに未だにそんな事も理解出来ない、いや、したくないのか、  
なのはは魔法を捨てる決断が出来ておらず、訓練にも身が入らない。

揚陸艦で訓練所を離れたシェーンコップは、みっちり筋トレをやらされて筋肉痛のひどかったはやてを呼び出した。

「よう、気分はどうかね？」

「身体中が痛いです。正直動きたくないです」

「そうか、それは良かった。だが最初の筋トレさえ乗り越えられないお前達にはがっぽり稼がせて貰ったからな、お礼に・・・」

「また賭け事ですか、しかも私達を対象にして・・・お礼につて、きつとろくな事じゃなさそうですね」

「良く解ったな。・・・この近くにある観測基地の駐屯軍から救援要請があつた。何でも“時空管理局”なる武装集団が“口ストロギア”の引き渡しを求めているそうだが、駐屯軍の連中は何の事だかさっぱり解らん。そこでお前達の出番だ」

「それがお礼ですか？」

「ああ、適当に追い払え。ついでに薔薇の騎士としてのけじめもつけてこい」

「・・・・・・・・・・了解しました。ただし、現地での行動、部隊編成に関しては私に一任して下さい」

「任せよう」

訓練風景（後）  
完

はやてとアースラ（前）（前書き）

やっとな管理局・・・。

## はやてとアースラ（前）

### 第22 観測基地。

付近にある恒星の観測を行う小さな観測基地。

職員は100名程で、それに警備の駐屯軍が一個分隊。

この駐屯軍は、せいぜいビーム・ライフルや無反動オート・ライフルぐらいの軽装備で、車両どころか装甲服さえ至急されない程のお粗末な部隊だった。

しかしある日、何時ものように門前の警備をしていた兵士の前に杖のような物を持った1人の少年が現れた。

「よう、どうした坊や？この観測基地に何か用か？」

「坊やじゃない！……僕は時空管理局のクロノ・ハラオウンだ。この基地の地下からロストログニア反応が検出された。搜索させてほしい」

クロノとしては、いきなり時空管理局と言われても相手が理解出来ない事はわかってる。

しかし、それ以外に言い様が無いのだ。

であれば、PT事件の時のなののように、こちらの話を真面目に聞いてくれる相手である事を祈るしか無い。

兵士は、はあ？と言った感じに首を傾げ、笑いながら言った。

「時空管理局？ロストロギア？何だそれ？……とにかく、此処に入りたければ身分証と許可証でも提示してくれ。大人を余りからかうんじゃない、坊や」

「だから坊やじゃない！とにかく、解らないかも知れないがロストロギアは危険な物なんだ。搜索させてほしい」

「だから部外者は中に入れちゃいけないんだ。その“ロストロギア”とか言うものが有るのかどうか、上に確認取ってくるからちょっと待ってろ」

そう言つと兵士は軍服のポケットから電話を取り出して話を始めた。

「………解りました、失礼します。………やっぱり無いつてよ、残念だったな、坊や」

「何度言つたら僕が坊やじゃないつて解る！？………そうだ、その上の人達と話をさせて下さい。お願いします」

「何度言つたら無理だつて解る？他を当たれ、坊や」

段々苛ついてきた兵士。それに対し、何かを決意したようなクロノ。

「………このロストロギアいずれ災厄をもたらす物だ。少々の犠牲は仕方ないな」

クロノは、相手が魔法文化の無い世界の住人であり、ロストロギアが暴走しても止める手段が無い。

故に無理矢理にでも封印すべきだと決意した。

クロノが念話で母艦アースラに連絡を取ると、たちまち基地周辺に多数の魔法陣が出現。

気が付けば30名程のアースラ武装隊が基地を取り囲んでいた。

「強行突破だ」

「くっ!？」

危険を感じた兵士が、緊急事態を告げるベルを鳴らす。

同時に基地内に逃げ込もうとしたが、クロノが放った水色の魔力弾を受けて倒れ込んだ。

ベルが鳴った基地内では、職員が緊急避難を始め、警備兵が次々と武器を持って正面玄関付近に集計する。

この基地の警備隊長ブレッツェリ中佐は何時もより1人少ない部下達と共に自身も24口径の無反動式オートライフルを構えて走った。

そして正面玄関付近に到着、ブレッツェリは即座に窓の外に向かって引き金を引き、実弾をばらまいた。

クロノが突入の命令を下し、武装隊が塀を乗り越えて基地内に侵入した。

その時、窓の内側から閃光が幾度か閃き、1人の空を飛んで侵入した隊員が撃ち落とされた。

「・・・・・・・・質量兵器か！」

クロノは即座に判断を下し、隊員達に基地内部への射撃を命じた。その間にもビームや実弾が飛んできて更に3人撃ち落とされていた。

その後は武装隊と警備隊の激しい撃ち合いになったが、建物の壁に身を隠しながら塀を乗り越えてくる敵を撃ち落とす警備隊側が有利だった。

武装隊員は基地内部に侵入するのが目的であり、その為には塀を越えなければならず、敵に無防備な姿を見せる事になる。

あまり砲撃を得意としないクロノにはこの状態を切り抜ける方法が思い付かず、戦闘は硬直状態に陥っていた。

基地内部で歓声が上がった。

救援が来たのだ。

まずい、このままでは自分達は前後から挟撃され全滅しかねない。

一旦アースラに引き上げるべきか……。

「我も同感だ。厄介な事態にならぬ内に引き上げるべきだろう」

狼形態のザファイラが返した。

「そうだな、態勢を立て直すべきだ。正直この世界の軍を侮り過ぎたらしい」

そう言ってクロノが撤退を命令しかけた時、

「なんだ、この魔力……かなりの高ランクだ……しかも3人」

後ろを振り返ったクロノとザファイラが見たのは、装甲車に乗り此方に向かってくる薔薇の騎士連隊の姿だった。

先頭の1台、その後部座席に座っていた1人が拡声器を握って言った。

「聞こえるか、時空管理局。今すぐ戦闘を中止し降伏しろ！」

「な・・・・・・・・あれは」

「主はやて・・・・・・・・」

連隊でも特別な装甲車、“気紛れヨハン”に乗って基地に向かうのは、はやて、シグナム、ヴィータ、シェーンコップの4人。

「主はやて、何故なのは達を連れてこないのです？」

シェーンコップの細かい注意を受けながらハンドルを握るシグナムが尋ねた。

「うん、それはな、なのはちゃん達はいつも管理局から離れる覚悟は出来てないみたいやからな、いつその事私らだけで片付けてしまおうかと」

「そうですか。ならやはり管理局とは敵対する道を選ぶと？」

「違う。今敵対したって利益は無い。ただ味方が攻撃されよるか  
ら追い払うだけや。同盟の軍人としてな」

はやてはおもむろに車内から拡声器を取り出すとスイッチを入れ、

「聞こえるか、時空管理局。今すぐ戦闘を中止して降伏しろ！」

降伏はともかく、戦闘は中止したクロノ達を装甲服を着た陸戦隊員が取り囲み、油断無くビームライフルの銃口を向けている。

もしクロノ達が不穏な動きを見せようものなら即座に引き金を引くだろう。

クロノ、人形になったザフィーラの前に3人の魔導士らしき兵士が現れた。

そして3人は電磁石のスイッチを切り、ヘルメットを外した。

「久しぶりやな、クロノ君」

はやてとアースラ（前） 続

はやてとアースラ（後）

アースラ艦内、艦長室。

突っ込み所が多そうな似非和室に向かい合うように正座しているリンディとはやて、それにクロノとシェーンコップ。

シェーンコップは慣れない正座に辛そうだ。顔には全く出さないが。

あの後、一旦クロノ達を拘束して事件を片付けた後、クロノだけ解放して、はやてはシェーンコップを連れてアースラ艦内へと転送した。

一瞬で全く別の場所へと移動した事を知ったシェーンコップは、  
「ほう、魔法も捨てた物ではないな」  
と感嘆していた。

クロノとしては魔導士でもない部外者を機密いっぱいの艦内に連れて行くような事はしたくなかったが、彼の背後では、はやてがブラスターの銃口を突き付けていた。

「クロノ君、自分の立場わかつとる？」

「わかっている。母さ・・・ハラオウン統括官の元へ連れて行けば良いのだろう？」

「やったら四の五の言わずにさっさと動けや。蜂の巣にするで?」

そして冒頭に戻る。

「あら、はやてちゃん。無事だったのね。皆連絡が付かないから心配したわよ」

「あんな星に送り込んで良く言うわ。事前に教えてくれたってええのに」

「それは謝るわ。此方も調査不足だったの。まさかあんな酷い環境の星だったなんて」

「で、今度はなんや、戦争中か。私らもろに巻き込まれたで」

「だから調査不足だったの、謝ってるじゃない。……それで、任務はどうだった?」

「ロストロギアは回収できた」

「こんな酷い世界においてけぼりにしちゃった事、本当にごめんなさい。物資や武装隊が被害を受けた事もあるし、私達は一旦ミッドチルダに帰るわ。休暇をとるからゆっくり休んでちょうだい」

「それはありがたいけど、休めんわ」

「あら、どうして?」

「私達はこの世界に残る」

「!?!?・・・理由を、聞かせて貰えるかしら」

「まず前置き。これは、あの後起こった事やけどな・・・」

はやてはヴァンフリート星域で起こった事を洗いざらい話し、その後シェーンコップに明かした気持ち等をリンディ達に明かした。

「やから、私はこの世界に残って、ちよつとでも強くなろうと思う」

はやての話を黙って聞いていたリンディ。

「はやてちゃんがそれでよくても、他の皆はどうなの?」

「勿論、機動六課は全員残らすで」

「本人達の希望も聞かずに?」

「そうや、今まで私らは優遇されすぎとった。この世界でその緩んだ性根叩き直さんといかん」

「あら、貴女達はJS事件でも大活躍だったじゃない。性根が緩んでる、なんて誰も思わないわ」

「……管理局が質量兵器を禁止しとる理由が分かった、管理局が天下を取るためには質量兵器が邪魔やきんや」

「……?」

「たとえばSSランクの魔導士でも、よく訓練された、質量兵器で武装した兵士1人にも敵わん。だから禁止するんや、管理局が次元世界を支配するのには魔法が最強でなくてはならないから」

「支配だと？……管理局がそんな事をすると思うか？」

声を上げたのはクロノである。

リンディは何も言わない。

「クロノ君やって、あちこちの次元世界に出向いたからわかつとるやろ。管理局に反感を持つ人は少のうないって事」

「それはそうだが・・・実際管理局の恩恵を受けて平和な世界もある。それを支配呼ばわりはやり過ぎたろう」

「支配しとるかそうでないか、平和か荒れとるか、その2つには関係は無い。戦争と平和は対義語ちゃうで」

勿論クロノにも、管理局にそういう面がある事は分かっている。

だがはやての言い分には納得出来ない。

一方、

「さて、お会いするのは二回目ですね。・・・足、崩されても結構ですよ」

「そのようだな、リンディ・ハラウン。俺はやて達のお守りのシェーンコップだ。・・・そうさせてもらおう」  
シェーンコップはあぐらをかいた。

「貴方は時空管理局にどのようなイメージを？」

「はやてから聞いた限りでは、ハイネセンの政治家並みに嫌な連中だな。自分だけ安全な場所にいて、俺達に“死ね”と命令する。・・・最も、そちらに至っては10歳にも満たぬようなガキさえ戦場に駆り出す分、余計タチが悪いかもしれんが」

「中々辛辣な事を言いますね。・・・でも、広大な次元世界の治安を維持しなきゃならない管理局は常に人手不足なんです。こうでもしなきゃ管理局が存在意義を失うわ」

「なら、最初から管理しなければ良い。国ならともかく、世界単位なら自分の身を守るくらい力の力はあるだろう。どうしても管理して欲しい物好きな世界だけ管理している」

「たえそうであつても『やれ』と言われている以上はやるしかないのよ」

「ま、管理局がどんな組織であろうと、俺がそこに口を出す権利なんて無いんだがな。・・・それでも、この世界にはこの世界のルール

と秩序がある。余所者は黙って傍観してもらいたい」

「あら、意味が解りませんか？」

「管理局はこの世界に干渉するのはやめてもらいたい。同盟は帝国の相手をするのに精一杯でな、お前たちにかまってやる余裕は無いだろう」

「別に構ってもらわなくても、自分たちで行動できるぐらいの力はあるわ」

「そういうことじゃない。なんせ温厚なことで知られるこの“薔薇の騎士”連隊だったから良かったものの、帝国軍や海賊連中に出会ってみる、問答無用で襲ってくるぞ？」

「勿論、その時は武力をもって身を守るつもりでいるわ」

「そんな事をしたら、管理局はこの銀河共通の敵になるな」

「貴方達に一方的に殴られるほど管理局は弱くないわ。伊達に多数の世界を“管理”なんてしてないわ」

「ほう？ならばお前達魔導士は宇宙でも戦えるのか？何万隻という大艦隊を見たことがあるか？」

「それは……流石に無理ね。BJも真空相手じゃ役に立たないわ。

…その同盟や帝国は、それほどの兵力を用意できるの？」

「同盟軍は5000万の兵員を抱え、1万5000隻前後を一単位とする宇宙艦隊を12個保有している。帝国軍はそれより多くの兵力だ。これらを同時に敵に回す気か？」

「な……………確かに、貴方達に比べれば管理局の戦力は小さなものね。でも、それを私に教えて、貴方はいったいどうしたいの？」

「最初に言っただろう？手を引けと」

「……………解ったわ。確約は出来ないけど、一応報告ついでに進言はしておきます。それから、はやてちゃん、機動六課の事だけど……」

「……………」

「貴方達にお任せします」

「ほう？てつきり力尽くでも取り返しに来ると思っていたが」

「何時かはあの子達もそういう現実を知らなきゃいけない、それが管理局の未来を担うエースなら尚更の事。幸い、貴方達は信用できそうですから預ける事にします」

「だが、俺達がいるのは戦場だ。それもお前たちが経験したものは比べ物にならない、人が何百万とくたばるものだ。一応鍛えてはやるが、死んでも責任はとれんぞ」

「はい、確かに悲しいですが、それはあの子たちの責任ですから。……それと、この艦に残っている

機動六課のメンバーも連れて行ってください」

「鍛え甲斐はありそうか？」

「さあ？それは御自分の目で」

「まあ、良いだろう。…しかし、そんなに抜けてそちらは大丈夫なのか？」

「上には適当に言い訳しておきます。それから、たまに様子見に来るので、その時はよろしくお願いします」

リンディはシェーンコップに小型の通信機を渡した。

「そうか、俺に言われても困るんだがな。まあ良い、おい、はやて、そろそろ引きあげるぞ」

「え？もう終わり？」

クロノとやや幼稚になってきた言い争い、もといシェーンコップ譲りの舌でクロノに言葉の暴力をぶつけていたはやてが振り向く。

「ああ、拾うもの拾ったら帰るぞ」

「拾うもの？…ああ、機動六課か」

「さて、はやて！逃げる気か！」

「何とでも言いや、負け犬。身体は子供で脳みそは大人って、どこの小学生や」

「誰が小学生だ！」

「んじゃ、帰りましょう。シェーンコップ大佐」

「ククク、そうしよう。リンディ・ハラオウン、拘束した局員達は

解放しておくぞ。忘れずに拾っておけよ？」

「みんなー、はやて隊長のお帰りやでー」

輸送艦に戻ってきたはやて、シェーンコップ、その他。

部屋に入ったはやては、中にいるのは達に新入りの紹介をする。  
「さて、家に新たに入隊した、シャマルにザフィーラにアルフ、その他大勢や」

「いや、普通に紹介してくれないか？」

主にヘリパイロットとして彼女らをサポートしていたヴァイス。

そんなヴァイス以下その他の心の声をスルーしてはやては、  
「じゃ、みんな頑張ろうでー」



## はやてとアースラ（後）（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

なお、作中のはやての質量兵器談はあくまではやて個人の考えであり、本作の設定とは関係が薄い事を書いておきます。

私は軍オタではあれど質量兵器を無条件に賛美しているわけではありませんし、管理局を劣化させるつもりもありません。

## 新メンバー入隊（前書き）

日常編？は今話で終わりです。  
次回より銀英伝本編に戻ります。

## 新メンバー入隊

「貴官があゝの薔薇の騎士連隊のシェーンコップ大佐ですか。御高名はかねがね」

基地の警備隊長ブレツェリ中佐が握手を求めた。

「貴官こそ、少ない戦力で良く耐え抜いた。怪我は無いか？」

シェーンコップは握手を返した。

「ま、大したことはありません。・・・この基地も閉鎖になりましたし、小官はさらに辺境へ移りますよ」

「確か、次はL77基地の司令官だったな。大佐への昇進も決まった。中々平和で結構な事じゃないか」

「そうですね。小官も死ぬのは嫌ですし、出来る事なら後方へ配属されたいと願っていました」

「ははは、願いが叶うのは良い事だ。頑張れよ、また会うことがあったら、中佐の勇戦に敬意を表して、酒の一杯位は奢ろう」

その言葉を最後に、2人は握手していた手を離し、それぞれの艦へと足を向けた。

イストリア艦内。

「エリオ、キャロ、あれお願いな」

はやての声で、2人が一斉に厨房へと駆け出す。

部屋に集まった機動六課のメンバーに、エリオがコーヒーを、キャロが紅茶を持ってくる。

何故2人が違う飲み物を淹れるのかといえば、キャロは単なる好みで選んだだけである。

そして、エリオは最近シェーンコップに対し尊敬に近い感情を持つようになっており、時折シェーンコップに訓練参加を懇願しに入っているらしい。

そしてシェーンコップの回答は、

「そうだな、美味しいコーヒーを淹れられるようになったら、まあ軽い手解き位はしてやろう」

「それで、主はやて。我等はいつたいどの部隊に配属なのだ？」

「基本的には私らと同じ、この小隊やな。シャマルは衛生担当の少尉として幹部に、ザフィーラは曹長で第1分隊に入ってもらって。その他はシャマルと一緒に私の所や。因みに全員一等兵から軍曹まで適当に階級割り振っとるきんな」

「・・・またその他扱い、泣いて良いですか？」

「武装隊員改め同盟軍伍長がなんか言よるけど無視な」

「俺の事が嫌いなんですか？」

「いや、弄ると楽しいからやな」

「泣く事にします」

「さて、アレは放っておいて、此処だけの話、第1分隊は後方支援に回そうと思うんや」

「何故ですか？後方支援ならもう充分な人数が」

「シグナム、これは余り本人の前では言えんのやけどな、なのはちゃんは基本的に役立たずやからや」

「あの、はやてちゃん？私いるんだけど・・・」

「なのはちゃんは筋金入りの運動音痴やし、私らの中では唯一人射撃、格闘、機械操作の訓練全部で士官学校落第レベルの成績をとったんや」

「・・・・・・・・」

射撃はブラスターを用いた的当て、格闘は素手やナイフ、トマホークの対人戦、機械操作は車両の運転やレーダー等の機械の操作を主題とする。

なのははその全てで点数が50点を下回った。

同盟軍の士官学校では、一度でも試験で50以下の点数をとると落第する。

士官学校卒業、と言う事になっているはやて達にしてみれば、どう考えても卒業出来なさそうな人が小隊内に居るのはおかしい。

もし疑問を持たれて嘘だらけの履歴書を調べられでもしたら、ちよつと不味い事になる。

そう考えたはやては、なのは達を後方に下げる事にした。

「デバイスの補助無しで的に当てれるようになるか、装甲服着たままで1キロ走れるようになるか、トマホークに自分が振り回されんようになるまで、なのはちゃんは前線に出さん」

「むう、魔法を使わない、というのは我等にとって中々厳しいかな」

「ザファイラなら直ぐ出来るようになると思うで。なんせシグナムにヴィータ、スバルにティアナ、私もギリギリで合格点取れるんや。ザファイラやシャルに出来ん道理はあらへん」

「・・・なんか1人可哀想な少女がいるわね」

シャルが部屋の隅を見た。

「・・・えぐっ、どうせ私は・・・」

「あの、そんなに落ち込まなくても、次頑張ればきつと・・・」

なのはが暗い影を纏いながらグスグスと泣いており、フェイトに慰められていた。

そんななのはに近寄り、

「大丈夫や。人には向き不向きっちゅうもんがある。今回はなのはちゃんの才能は魔法方面にしか無かったただけの話やから、あんまり落ち込まんとしてっかり練習しいや」

「主はやて、フォローになっているのか非常に疑問なのだが・・・」

「

「才能が無い・・・にやあああああ！」

なのはは大泣きしながら部屋を飛び出していった。

「よし、しつかり止めも刺してきたし、次の話いこか」

「はやてちゃん、すっかりシェーンコップ大佐に毒されちゃったみたい・・・」

「テストロッサ、私も同感だ」

隅でフェイトとシグナムがボソボソと話していた。

新メンバー入隊 完

## 第6次イゼルローン要塞攻略戦（前）（前書き）

薔薇の騎士はやての初陣です。

## 第6次イゼルローン要塞攻略戦（前）

同年、10月。

自由惑星同盟軍は、史上6回目となるイゼルローン要塞の攻略に着手した。

今回の会戦に動員された艦隊は3万6900隻。

この大艦隊がラザール・ロボス元帥、参謀長ドワイト・グリーンヒル大将に率いられて、要塞に挑んだ。

今回の会戦は、要塞攻略戦であるため、陸戦隊が動員されている。

“薔薇の騎士”連隊専用の強襲揚陸艦イストリアの一室。

「なあ、シグナム。私ら、これから殺し合いしに行くんやんな」

「はい。私にとっても久しぶりの戦場です。怖いですか？」

「当たり前やろ・・・今更やけど、足が震えてしゃあないわ。死ぬんは怖い」

「ま、私が居ますし、シェーンコップ大佐等も居ます。あの人達に付いていけば大丈夫でしょう・・・流れ弾等はどうにも出来ません」

「そうやな、頼りにしとるでシグナム・・・って早速不安にな

るような事言わんといてや」

「流れ弾に關しましては完全に運の問題なので、氣にしても仕方ありません。適当に祈っておいてください」

「そやな・・・リイン」

「はい、何でしょー？」

「ほんまに頼むで、私の生死はリインに掛かっとなると言っても過言じゃないんやで」

「りよーかいです！絶対に1人で死なせるような事はしません！」

「・・・なあ？誰か嘘でもええから、大丈夫って断言してくれんか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

同盟軍と帝国軍の戦いが始まった。

2万隻と数に劣る帝国軍は、要塞の前面へ引き摺り込むべく、各部隊が小刻みに戦い、後退を繰り返す。

同盟軍は、後退する敵に対して、平行追撃に持ち込み、帝国軍が頼みにする、イゼルローン要塞の主砲“雷神の鎚”<sup>トールハンマー</sup>を無効化するべく敵を押す。

戦場となる宙域を数百に区切り、互いに奪い合う。

その戦場の一角に、少将となつたラインハルト・フォン・ミーゼル率いる3000隻の帝国軍艦隊がの姿があつた。

その艦隊の旗艦。

「キルヒアイス、どうやら同盟軍に見るべき人材はいないらしいな」

ラインハルトはたつた今壊滅させてやつた同盟軍の分艦隊を蒼氷色の瞳で見やつた。

「ラインハルト様、これからどうなされますか？」

「そうだな、兵に1時休息をとらせて、再出撃だ」

自身の副官、ジークフリード・キルヒアイスに狩人のような笑みを向けると、そのまま艦橋を出ようとしたが、

「む、それは何だ？」

キルヒアイスは指輪をつけていた。

「はい。以前ヴァンフリートで私が死を看取つたとある下士官から託されました。何でも御守りだとか」

「そうか、大事にしておけよ。キルヒアイスに何か有ったら俺はどうする。姉上も悲しむ」

様々な局面で大小の物語はあれど、全体には余り関係が無い。

数で勝る同盟軍は前進し、10月から11月に掛けて少しずつ戦場はイゼルローン要塞前面へと移行していった。

「さて、そろそろ準備しろ」

シェーンコップの指示とともに隊員達に緊張が走る。

「ああ、いよいよやな」

はやても装甲服を着込み、他の隊員達と同じ様に待機していた。

「隊長・・・」

横で二丁のブラスターを手入れしていたティアナが心配げに呟いた。

「ま、私たちは基本シェーンコップ大佐に付いていく事にしたきん、何とかなるやろ」

そう言いつつはやはり自身の武器としてビーム・ライフルを眺めた。

「そっういや、スバル達は何を使うんや？」

「えっと、スバルがりボルバーナックルとマツハキヤリバー。装甲服と合わせて使うのでデバイスとは解りづらいです。シグナム隊長、ヴィータ副隊長がトマホークです。なのは隊長は・・・恐らくレイジングハートかと・・・」

「・・・やつは魔法使う気が、あの子は」

「いや、あの、見た訳では無いんです、単に私の想像で・・・」

「別に、最初から予想しとった事や」

「えっ・・・？」

「シェーンコップ大佐達の指導を受けた今やからこそ言える事やけど、今まで私等がしよった教導方法は間違っとな。ただひたすら長所を伸ばすだけやったけど、人間が本来得意やったんは集団戦や。私らはそれを無視してひたすら個人の戦闘能力を上げる事ばかり考えとった」

「でも、実際に成果は出ています」

「違う。それは敵もひたすら個人戦ばかりやったからや。この世界の戦争は集団戦、数と連携で勝負が決まる。周りと協調できん限り無力や。それを私は教わった」

「じゃあ、なのは隊長は・・・？」

「なのはちゃんは過去の栄光にすがり付いとるだけや。ええ加減に吹っ切らんと死ぬで、あの子」

「そんな事は無いと思います」

「いや、そうや。ティアナはこの世界で何を勉強した？この世界の戦争で魔法は役に立たん。しかも敗北」死」

「それは、解ってます・・・」

「せやから・・・これは今言ってもしやあないか。ティアナ、出撃前に皆を集めてくれんか？」

「次元震です！ワープ・アウトのようです！」

オペレーターからの報告にラインハルトが端正な眉をしかめた。

ラインハルトは3000隻程の艦隊を率い、ほぼ同数の同盟軍ラムゼイ・ワーツ少将率いる小艦隊相手にたった今、中央突破を掛けようとした所である。

「敵か、味方が、どっちだ？」

「解りません、識別信号を感知出来ません！」

「では敵として行動しよう」

キルヒアイスから無言の同意を得、突破を命令しようとしたがその矢先、

『我々は時空管理局所属、次元航行艦ガナードである。貴艦よりロストログア反応を感知したゆえ、1時戦闘を中止し、調査隊の受け入れを要求する。繰り返し、ロストログア付近での戦闘は危険故、戦闘を中止し、調査隊の受け入れを要求する』

この通信が届いた時、ラインハルトは艦橋で、彼には相応しく無い間抜けな声を上げた。

「はあ！？なんだあいつらは！？」

「お、落ち着いてください、ラインハルト様。きっと叛乱軍の罠です！？」

言うまでもないだろうが、この混乱は同盟軍でも同様の物であった。

だが謎の艦の目的はどうやら向こうの艦らしいのでラインハルトよりは落ち着いていた

もしはやてがこの場面を目撃していれば、

「勇気と正義感は一級品やな。管理局員の鏡やで」

とても皮肉っただろう。

ラインハルトはキルヒアイスの協力もあり、なんとか混乱から立ち直る事が出来た。

それと同時に、自身の完全勝利を邪魔された事への怒りが沸き上がった。

「艦長、叩き潰せ！」

命令に答えた艦長が主砲を発射を命令する。

『なお、警告を無視するならば此方には武力行使の用意が・・・

艦長が喋れたのは其処までだった。

放たれた幾十ものビームの内、シールドで防ぎきれなかったものが艦橋を吹き飛ばしたからだ。

「目標の鎮圧を確認しました」

「よし、では叛乱軍の始末に戻ろうでは・・・敵はどこに行った！？」

「我々が謎の艦を相手にしている間に撤退しました」

「なに！？・・・まあ良い、とにかく、あの謎の艦の残骸を牽引しろ！イゼルローンに帰投する！」

この時、内心まだラインハルトのはらわたは煮え繰り返っていた。

「良し、皆集まったな」

ヴァイス、エリオ、キャロ、フェイト、シャマル、シャーリー等の留守番組を除く6人を前にしたはやて。

「まずはポジション確認や。なのは、シグナムは私と一緒に来いや。ヴィータ、ザフィーラ、スバル、ティアナはマシユンゴ軍曹達と一緒に行動してや。それから……」

「それから？」

「……いや、何でも無い。皆、なにがなんでも生き残るんやで！」

「……………了解!!」「……………」

第6次イゼルローン要塞攻略戦（前） 続



## 第6次イゼルローン要塞攻略戦（中1）

12月に入り、前哨戦に勝利した同盟軍はイゼルローン回廊に突入した。

これは同時に、薔薇の騎士連隊の出番が近付いている事でもある。

何故なら、彼ら宇宙一過激な亡命者集団は、要塞前面で戦う同盟軍と帝国軍の艦隊戦に飛び込み、さながら宇宙海賊の如く暴れまわるからだ。

彼らは帝国軍の艦に自身の揚陸艦をぶつけ、外壁に酸化剤を吹き付けた後、敵艦への斬り込みを行うつもりである。

目的は1つ。

元第11代連隊長であり、帝国に逆亡命したヘルマン・フォン・リューネブルク少将と決着をつける。

その為に彼らがとった作成がこれだった。

帝国軍・戦艦エムデン。

シェーンコップが先ず目を付けたのがこの艦である。

いきなり大物から狙うのは過激さ故だろうか。

「はあ・・・やっぱ駄目やろ」

はやてが呟いたのは、なのはに関する事である。

当初は予定通りなのはは留守番組にする予定だった。

しかし、はやては考え直して連れていく事にした。

何故ならなのはが絶対に承知しないからだ、それだけならまだ良い。

この分からず屋は絶対に命令を無視して付いてくる、仲間が命を掛けて戦っているのに自分だけのうのうとしているのは我慢出来ないだろう。

別にはやてはなのはを仲間外れにするつもりは無い。

それだけ後方支援は大事であり、後方がしっかりサポートしてくれるからこそ、前線組は全力で戦えるのだ。

しかし、此处に後方支援及び役割分担の大切さを理解していない馬鹿がいる。

高町なのは。

どうせ連れていった所で足手まとい以外の何者でもないだろうが、下手に命令無視でもされたら面倒だ。

別に自分自身の事を棚上げするつもりは無いが、責任を自覚しない指揮官と命令を聞かない兵士ほど戦場であてに出来ないものは無い。

戦場に正義感を持ち込む奴は真つ先に死ぬ。

かと言ってなのはを見捨てる訳にもいかない、仕方無いからシェーンコップ大佐に預けよう……。

イストリアの通路を1人の兵士が歩いていた。

1人は通路で少年にすれ違った。

「……あれ？あんなガキ艦に居たかな？」

兵士は気になってその少年が曲がっていった通路の角を覗いたが、いたのは走り去っていく1匹のフェレットだけだった。

「……俺の見間違いか？」

薔薇の騎士連隊は戦艦エムデンの外壁に開けた穴から侵入、シェーンコップ、はやて達は艦橋の制圧に、マシユンゴ以下その他の隊

員達は砲塔や弾薬庫の制圧にそれぞれ向かった。

戦場における殺人の技術を、洗練された一種の芸術と錯覚させる事のできる人物は滅多にいないが、ワルター・フォン・シェーンコップはその1人だった。

彼は全長85センチのトマホークを両手で縦横に振るい、迎撃に出た帝国軍の兵士達を次々と切り捨て、文字通り周囲に血煙の壁を築いていった。

カスパー・リンツはシェーンコップ程華麗な戦法では無いが、トマホークで確実に1人1人倒していく。

ライナー・ブルームハルトはハンド・キャノンを肩に担ぎ、帝国兵が数人固まっていれば吹き飛ばし、非常用シャッターが降りていれば破壊し、シェーンコップ達を援護していた。

一方、はやてはビームライフルを構えていたが、中々撃てなかった。

シェーンコップ達が正面にいる、というのもあるが、最も大きな理由は、はやてに人を殺す決心が付いていない事である。

なのはは、初めて本物の殺し合いを見せ付けられ、恐怖で半ばへたりこんでいた。

はやてとて、ヴァンフリートの戦場跡を見せ付けられていなければ、なのはとほぼ同じようになっていただろう。

シグナムはその2人に襲い掛かろうとする帝国兵を相手にし、トマホークを打ち合わせている。

マシユンゴ等と共に主砲塔の制圧に向かったティアナ達も、初めての“戦い”の恐怖に支配され掛かっていた。

ヴィータ、人形形態のザフィーラはトマホークを手に、連隊最古参の隊員に匹敵するような戦いぶりだったが、スバルは最初に意気揚々と突撃しかけ、ライフルで迎撃されかけた所を、ティアナが助けている。

ティアナが咄嗟に引き金を引いた二丁のブラスターから放たれたビームは、確実に帝国兵の頭と胸を貫いていた。

宇宙艦乗組員用の気密服をビームが貫き、鮮血が吹き出す。

「あ・・・ああ・・・」

ティアナは自分が今、人を殺したのだと理解した。ブラスターを取り落とし、逃げるように後ずさる。

「あ・・・ご、ごめん、なさい・・・」

蚊のようにか細い声で呟くティアナの前に、数人の隊員がさりげなく割り込む。

彼らもまた、初めて人を殺し、その罪悪感にさいなまれた経験があるからこそ、自分達の後輩が、この陸戦隊員としての試練を乗り越えられるように、さりげなくサポートしてやるのである。

隊員達は目指す場所ごとに別れ、マシユンゴ達は戦闘艇格納庫に向かった。

単座式戦闘艇を残しておくとは逆襲されかねない。  
だからハンド・キャノンを用いて徹底的に破壊していく。

マシユンゴ達が特に抵抗も無く破壊していき、格納庫の中央に置かれていた1機の戦闘艇に砲口を向けたとき、格納庫の通用口や整備器具、コンテナの物陰から帝国兵が飛び出した。

「・・・はめられたか！」

たちまち包囲されてしまった中で、誰かが悔しげに言った。

飛び出した帝国兵は自分達とほぼ同数。

おそらく整備員や戦闘艇のパイロットだろう。

しかし相手が物陰に隠れながら戦えるのに対し、此方は身を隠そうにも全て破壊してしまったのだ。

だからと言ってみすみす殺されてやるつもり等無い。

「まったく、戦艦乗っ取るうなんて過激で馬鹿げた事考えたのは何処の誰だか・・・」

マシユンゴが呟きながらトマホークを構えた。

第6次イゼルローン要塞攻略戦（中1） 続

## 第6次イゼルローン要塞攻略戦（中2）（前書き）

かなり遅くなりました、ごめんなさい。

## 第6次イゼルローン要塞攻略戦（中2）

マシユンゴがトマホークを振り上げ帝国兵に肉薄する。

その後ろでは数人の隊員が援護射撃を行っていた。

正確な射撃で帝国兵を物陰から出させず、その隙にマシユンゴ達が飛び込み、次々と斬り伏せていく。

これと同じ事が格納庫の各所で行われたが、全てがマシユンゴ達のようにうまくいったわけではない。

帝国兵の猛反撃を受け倒れる隊員も多数いる。

未だ立ち直らないティアナをサポートして奮闘していた隊員がいた。

彼は今まで訓練でよくティアナの面倒を見ていた、射撃を得意としていた古参の隊員だった。

彼はビーム・ライフルを構えてやや身を伏せながら閃光を放ち、既に4人の帝国兵を討っていたが、エネルギー・カプセルの交換の為に一瞬、自分の手元に気をとられた結果、ティアナを狙ってライフルを構えた帝国兵に気付くのが遅れてしまった。

「チッ」

間に合わない、と判断した彼はすぐさまティアナの前に飛び出し、ビームの直撃から庇った。

「やりやがったな・・・」

急いで身を隠そうとする帝国兵に向け銃火を一閃させ仕留めると、自身もその場に倒れ込んだ。

ティアナは、自分を庇って倒れる隊員の姿をしっかりと見ていた。否、目を離せなかった。

彼女は自分に向けて銃を構える帝国兵の姿が見えていたが、足がまったく動かなかった。

人を殺した罪悪感と恐怖に未だに心を支配され、その結果、あの人が死んでしまった。

自分がもつとしっかりしていれば、あの人は死ななかったかも知れない。

今まで、何かにつけて自分に射撃の技術や知識、色々な事を教えてくれた、まるでかつての兄のように思えていたかも知れないあの人を、自分のせいで死なせてしまった。

もう、躊躇わない。

戦場で人が傷付くのは仕方ない事かも知れない。

でも、自分のせいで自分の大切な誰かが死ぬのは嫌だ。

じゃあどうすれば良いのか。

解りきつた事だ。

自分達を殺そうとする敵を、殺される前に殺す。

目前の脅威を取り除かねば、皆安心できない。

勿論、殺される敵兵にも、守りたい家族や友達がいるだろう。

その人達には悪いと思うが、だからといって自分や自分の大切な人が殺されるのも嫌だ。

だったら仕方ない。

自分は敵を殺す。

その殺人の罪は一生を掛けて償おう。

ティアナは、目の前に倒れている彼の腰から、一丁のブラスターを抜いた。

これは射撃を得意とする彼が、自分専用にチューニングしたブラ

スターだ。

そのブラスターを両手で握って立ち上がると、ティアナは身を低く伏せながら駆け出し、奥で他の隊員に助けられながら、何とか自分も役に立とう、と動きまわっているスバルの元へ向かった。

スバルは得意のローラーを用いた高速機動で敵に近付こうとしていたが、そのやや直線的さが残る軌道を読まれ、一斉射撃の的にされかかった所を危うく他の隊員に助けられていた。

（ウィングロードやディバインバスターが使えたらなあ・・・）

そう思ってしまうスバルだが、実際に使ったとしたら余計悲惨な事になっていただろう。

この状況で空中に飛び上がるなど論外であるし、射撃魔法は狙う余裕も魔力をチャージする時間も無い。

そして一旦銃口を向けられたが最後、スバルは蜂の巣にされて終わりだ。

光速で飛び交うビームやレーザーは、攻撃を視認してから防御、または回避しようとする魔導士には絶対に防げない。

・・・そうして余計な事を考えていたのが悪かったのだらう、スバルは自分を背後から狙っていた銃口存在に気が付くのが遅れた。

「ッ!？」

慌ててその場から飛び退きかわしたが、空中に浮いた事で身動きがとれなくなり、続けて放たれた第2射を避けられず、腹にビームの直撃を受けてしまった。

幸い相手のライフルはエネルギー切れによる電圧不足で、スバルの装甲服を破壊するには至らなかった。

だが直撃の衝撃で体勢を崩し、ただでさえ無理な姿勢から飛び上がったのが、今度は頭から落ちてしまっていた。

「うつ・・・」

スバルは苦し気に身を起こそうとするが、固い金属の床に頭から落ち、ヘルメットを通じて直接脳に伝わった衝撃は、スバルから一時的に行動力を奪うには充分なものだった。

スバルを撃った帝国兵は、エネルギーの切れたライフルを捨ててブラスターを抜き、スバルの頭に銃口を向けようとしており、周りの隊員達は彼を援護している帝国兵の相手で精一杯であり、自分達から離れた所に落ちたスバルを援護出来なかった。

今まさにスバルに向かってブラスターの引き金を引こうとしていた帝国兵の身体を一本の閃光が貫いた。

続けて射撃が放たれ、計3本のビームが帝国兵の身体を抉ると、彼は身をよじらせながら倒れ込んだ。

「スバル、生きてる？」

「うっ……ティア？」

素早くスバルに駆け寄ったティアナが、スバルを格納庫の端の壁まで引き摺り、もたれかけさせた。

「あんたは其処で休んでなさい。負傷者はとっと引っ込まないと味方の迷惑だから」

「その……ティア、ありがとう……気を付けて」

「見事に戦死一步手前まで行ったあんたの言うセリフじゃ無いわね・  
・私は大丈夫だからあんたは其処でくたばってなさい」

そう言うときティアナはブラスターの銃身を折って中のエネルギー・カプセルを交換し、身を低く伏せたまままた戦闘に戻っていった。



## 第6次イゼルローン要塞攻略戦(中3)(前書き)

やっと完成しました。

## 第6次イゼルローン要塞攻略戦（中3）

艦橋を目指して艦内を移動していたシェーンコップ達は、順調に進んでいるように見えたが、彼らの本来の実力と比べてみるとその進撃はかなり遅かった。

言うまでもなく、はやてたちが付いてこれるような速度で前に進んでいたからである。

そのはやて達は、シグナムおよび何人かの隊員達に周囲を守られながら走っていた。

はやてはビーム・ライフルを構え、引き金を引くものの、その一撃は狙った敵兵から数十センチは離れたところを通っていた。いまだに、射線を外しているのは恐怖感ゆえだろう。

なのはに至ってはややうつむき加減で、武器も持たずにいる。

数時間後、艦橋を制圧したシェーンコップ達はすぐさま通信システムのハッキングに移った。

「出てきやがれ、リューネブルク、地獄直行便の特別席を、貴様のために用意してあるぞ。それともとうに逃げ失せたか！」

シェーンコップは通信装置を使用してかつての隊長に呼び掛けた。

その際、たまたま通信を傍受した味方の一部が、

『これは貴官らの私戦ではない!』

とたしなめたが、シェーンコップはごく簡潔に、

「私戦ですよ。でもなければ、とてもやってられませんな」

連隊長の毒舌をさらにリンツが補佐した。

「公務で人殺しをやるまで、まだ、俺達は堕ちちゃいませんよ」

その上、ブルームハルトがその背後で、ハンド・キャノンの遊低を音高くスライドしてみせたので、その味方は閉口して説得を諦めたのであった。

通信が切られ、後は母艦に戻るだけ、となった艦内。

シェーンコップはふと思い出したかのようにリンツに近寄ると、ヘルメットを接触させ、他人に傍受される事の無い、接触話法で話し掛けた。

『はやて、なのはをちよいと“教育”しておく。お前達は先に帰っている。他の連中にはお前から伝えてくれ』

『……ああ、アレですか。自分も新人の時にやらされて、しばらく……とにかく、早めに帰って来てくださいよ?』

『わかっているさ、任せておけ。俺達の“仲間”になるためには

必要不可欠な事を教えるのだからな』

ヘルメットを離すと、リンツは装甲服に備え付けの通信機を使って指示を送り出した。

場所は変わり、時はやや遡って12月1日。

自由惑星同盟軍は、ついにイゼルローン要塞の前面に展開した。

三万をほこる同盟軍艦隊を迎撃するため、帝国軍艦隊二万が出撃。これが立て続けに主砲を斉射し、数万の光条が宙空を貫き、爆発光が各艦のスクリーン上で脈動する。

この間にも、9億4000万メガワットの出力をほこるイゼルローン要塞主砲“雷神のハンマー《トゥールハンマー》”はエネルギーを充填させていく。

ひとたび雷神が咆哮すれば、射程内のあらゆる物をマイクロン単位の塵にかえてしまうだろう。

「D線上のワルツ・ダンス《ワルツ・ダンス・オン・ザ・デッドライン》」

同盟軍が多大な流血の果てに習得した、艦隊運動の粋である。

要塞主砲の射程距離を正確に判断し、その線上を軽快に出入りして敵の突出を誘う。

この戦術をとられた帝国軍は、それでも何とかして同盟軍を射程内に引き摺りこむべく、D線上に艦隊を突出させる。

そんな、ロボス元帥、ミュッケンベルガー元帥、同盟、帝国双方の宇宙艦隊司令長官どうしによる虚々実々の駆け引きは二時間にも及ぶ硬直化した戦いとなっていた。

しかし、その硬直化した戦いに変化が訪れた。

D線上に帝国軍艦隊を引き摺り出した瞬間を狙って、要塞主砲の死角からミサイル挺の一群が襲い掛かったのだ。

数千ものミサイルの大群が要塞の数ヶ所に集中して叩き込まれ、爆発によって生まれた膨大なエネルギーは、要塞表面の多くの砲座、銃座を吹き飛ばし、装甲を傷付けた。

“主力部隊を囷とする”

と司令部が豪語したこの作戦は、一見成功したかのように見えた。

しかし、彼らには一つの誤算があった。

要塞内にまだ十分な兵力が残っていたのだ。

ラインハルト率いる分艦隊は、ラムゼイ少将の艦隊こそ、時空管理局に横槍を入れられ取り逃がしたものの、その後も幾つかの部隊を打ち負かしていた。

途中、一度ヤン・ウェンリーの策略にはまり800隻あまりを失ったが、それでもいまだ2200隻を擁しており、要塞内で出撃の機会をうかがっていた。

ラインハルト艦隊の攻撃で、元々装甲など無きに等しいミサイル挺は次々と撃破され、艦隊の体をなさなくなってしまった。

さらにハイエナの如く要塞内の残留兵力がわらわらと出撃し、一方的に蹂躪されるしかない彼らに群がった。

その後、止めとばかりに帝国軍艦隊の主力が後退し、ミサイル挺の蹂躪に参加した。

それに対し、友軍の救援のために同盟軍艦隊も、要塞主砲射程内に踏み込み、要塞前面では、第五次の戦いを彷彿とさせる、凄まじい乱戦となった。

一旦乱戦に持ち込めば、味方撃ちを恐れて帝国軍は“雷神のハンマー”を使えなくなる。

この時乱戦に参加した艦艇の中に、“薔薇の騎士”連隊専用強襲揚陸艦イストリアの姿もあった。

第6次イゼルローン要塞攻略戦（中3） 続

## 第6次イゼルローン要塞攻略戦(中4)(前書き)

・・・なんか不完全燃焼。

## 第6次イゼルローン要塞攻略戦（中4）

戦艦エムデン 艦橋

艦橋の中央にある艦長席に座った1人の男と、その前に立っている2人の女がいた。

「お前達2人に聞くぞ？・・・今日、この戦いで何人殺した？」

男、シェーンコップの問いに対し、2人の女、はやては申し訳なさそうに、なのはは心外だ、とても言わんばかりの声色で返した。

「ゼロ、です」

「人殺しなんてしてません」

シェーンコップは2人の答えに軽く頷くと、

「そもそもお前達を残させたのは、この戦いがお前達のテストを兼ねていたからだ。・・・実戦の心構えがどれだけ出来るか、というな」

「・・・それが、人を殺す事だつて言うのですか」

「お前達が元いた世界では、戦争では人が死なないのが当たり前らしいが、この世界では死ぬのが当たり前だ。故に敵を殺せない奴は味方の足手纏いになる」

「殺せない、私やなのは達は足手纏いですか？」

「ああ。このテストの事は、連隊幹部全員が知っている。お前達2人と、あのスバルとか言う奴以外は合格だった」

シェーンコップは其処で一旦口を閉じ、やや真剣な顔色で話した。

「・・・この際だから言っておくが、お前達時空管理局の人間は、俺達の間では余り信用されていない」

「・・・何ですか？ 私達がよそ者だからですか？」

「それもある。だが、隊員どもの不信感を決定的にしたのは、エリオ、キャロ2人が“戦闘要員”としてお前達と共に居たことだ。・・・年端も行かぬ子供を戦場に送り込んで、平然としていられるお前達には、多くの連中が怒りを通り越して、あきれを感じたそうだ」

「・・・でも！2人はちゃんと実績も上げています！」

「そういう問題ではない。・・・確かに今の同盟軍にも、16、7ぐらいの少年兵はいる。しかしな、幾らなんでも10歳前後の奴を動員するなんて発想、この世界では有り得ん」

流星のはやても、言い返す言葉が見付からない。

彼女も短期間ではあるが、この世界を見て、少しずつ管理局的な思想から抜け出しつつあったのだ。

故に、エリオ等を初めとする少年兵について、改めて考え直す事があった。

はやてはこの世界の戦争を知って最初に驚いた事は、その物量で

ある。

艦隊戦さえ万単位、陸戦に至っては何十万、という数が戦うのだ。さらに後方支援を入れればどれだけの数になるか、想像も付かない。

戦争は数で決まる。

誰が言ったのかは忘れたが、戦争で重要なのは質より量なのだ。

如何に自分達が優秀な魔導士でも、万単位の敵に敵うとは思えない。必ず途中で魔力が底を尽き、討ち取られる。

だから、質が良いからといって子供でも戦場に送り込んでしまう管理局に、今度ははやて自身が不信感を抱き始めたのだ。

更に言えば、かつては自分の嫌っていた上司、故レジアス・ゲイズ中將の言っていた、

“子供を戦場に送り込むぐらいなら質量兵器を復活させる！”  
という言葉にも、いまなら賛同出来る。

自らの無知を自覚せず、ただ半ば見下すような感情をレジアスに抱いてきたはやてだが、戦争を知りたいまなら尊敬出来る。

いつか自分はこの世界を去ってミッドチルダに帰る事になるが、その時は自分もレジアス中將のようになりたい、とはやては考えだしていた。

高町なのはは怒りを感じていた。

不敵な笑みを浮かべながら、平然と人を殺せるシェーンコップに対し、なのはは腹の煮えたぎるような思いを感じていた。

エリオ、キャラが今までどれだけ頑張っていたか。

2人が今までどんな人生を歩んでいたのか。

フェイトが2人にどれだけ愛情を注いでいたか。

何も知らないくせに、2人を否定するような発言をした事に、最早なのはは爆発寸前だった。

今にも口を開いてシェーンコップに詰め寄ろうとしたのはだったが、それを制したのははやてだった。

「・・・シェーンコップ大佐、私達は、たとえ相手が殺意を持っていたように、絶対に非殺傷を貫くように、と管理局で言われてきました」

「・・・」

「でも、此处ではそんな甘い事は言えないし、出来ない。人を殺す事が出来ない軍人は、軍人失格ですか？」

「いや、その生涯で一人も人を殺さなかった軍人もいる。前線に出なければ人を殺す機会は余りまわって来ないからな」

「シェーンコップ大佐が、初めて人を殺した時は、どんな気持ちでしたか」

「余り気分の良いものでは無かったな。・・・最も、直ぐ慣れて

しまったがな」

「・・・わかりました」

はやてが小さく頷き、

「美少女のやわな心を傷付けた事、高くつきますよ。アフターサービスの手当は万全ですか？」

と、かなり無理をしながらだが、不適さを感じられる笑みをつくった。

「それだけほざければ結構だ。さ、次だが・・・」

『こちらリント。大佐、まだですか？次襲う準備は出来てますが』  
解った。直ぐに戻る」

シェーンコップは艦長席から立ち上がると、立て掛けてあったトマホークを回収して、艦内移動用の水素動力車を起動させた。

「残念ながら続きは次回だ。今言った事を考慮しながら、次の艦に切り込むぞ」



## 第6次イゼルローン要塞攻略戦（中5）（前書き）

今回はつなぎのようなモノです。  
毎度お馴染みご都合主義です。

## 第6次イゼルローン要塞攻略戦（中5）

強襲揚陸艦イストリアの艦内で、戻ってきたシェーンコップはリンツに軽く耳打ちした。

「おいリンツ、お前の所為で“教育”し損ねたぞ。お前が責任とれ」  
「ええ!？」

そんな二人を見ながら、シグナムはブルームハルトに訪ねた。

「ブルームハルト殿、一つ聞きたいのだが・・・」

「ん？ なんだ？」

「さつきから気になっていたのだが、“教育”とはいったい何をする事なのだ？」

「ああ、それなら・・・」

“薔薇の騎士”連隊の新人教育方は部隊に所属した経験があるものしか知られていないが、かなり過激である。

戦場跡で、もう助かりようのない瀕死の兵を連れて来て、新人に手を下させる。

瀕死の兵を苦しみから解放してやることと、新人を殺人に慣れさせる事を兼ねた“教育”である。

「・・・というわけだ。俺らみたいな今の幹部共も、新人の時代にはやらされていたよ」

「・・・成程、これまた過激な・・・その習慣はいつから存在したのだ？」

「さあ？少なくとも4、5代前の隊長のころからあったらしいな」

「そうか・・・今の主はやてやティアナならともかく、なのは達には不可能だろうな。だが、確かに重要な事かもしれん」

はやてはシェーンコップと一旦別れた後、自分の部屋に戻っていた。

彼女はそこでさっとシャワーを浴び、軽く身体を清めた後もう一度陸戦装備を整える。

装甲服を装着し、自身のビーム・ライフルの点検をしていると、部屋の何処からか声が聞こえてくるのに気付いた。

はやては最初、自身の相棒でもあるユニゾンテバイス、リインフォース？かと思ったが、その声は明らかに男性のものだった。

「・・・なんや？」

はやてが机に近付いてみると、その声は引き出しから聞こえていた。

「確か・・・此処は空やった筈・・・」

その引き出しに入っていたのは小型の通信機だった。

はやては不信に思いつつもスイッチを入れ、通話が可能なようにする。

「もしもし、こちら八神ですが・・・」

「・・・！ やつと繋がったか！・・・こちらクロノ、ヤガミ准将、聞こえるか？」

「クロノ君？ 仮にも提督様がこの世界に、今度は何しに来たんや？つて・・・・・・准将！？ 私が！？」

「ああ、とにかく事情を説明したい、今は何処にいる？時間はあるか？」

「時間とはかく、今此処は戦場の真っ只中やから来るのは止めたほうが良えで。それより、この通信機はなんや？ なんでクロノ君があるんか、なんで私が准将なんか、全部説明してや」

「・・・解った。手短に説明する。まず通信機の事だが、僕のはリンディ統括官から渡された。“はやてにはシェーンコップ大佐から専用通信機を渡してあるから”だそうだ」

「・・・いつの間に、私の机にそんな物を・・・大佐」

「次に、これが本題だが・・・ジェイル・スカリエッティが留置所から戦闘機人4人を連れて脱獄した。いまだ足取りは掴めていない」

「なんやて!？」

『これを受けて、管理局は対策部隊を立ち上げている。一度逮捕の実績がある機動六課隊員を中核とした、ものが』

「それで私達を連れ戻しに来た、って事やな。それは解った。で、准将は？」

「君はJS事件の際の実績で、既に一等陸佐への昇進が決まっていた。今回は本局も参加して、部隊の規模が大きくなるから、君を准将に昇進させて指揮をとらせる』

「スカリエッティの再逮捕には私にも是非協力させて欲しい、と言いたいところやけど・・・私には今やらないかん事が沢山あるんや。とにかく今目の前にある戦いぐらいは最後まで戦わしてや」

『・・・解った。三提督には此方から話しておく』

「最も、最後まで生き残ったたら、の話やけどな」

『頼むからそう不吉な事を言わないでくれ。こっちだって君と連絡が取れるまで、この“第122管理外世界”をうろついていたが、何度も死にかけたんだ。この世界の軍隊には敵と誤認されて襲われるし、ブラックホールには危うく巻き込まれかけたし、他には・・・』

「クロノ君、苦労しとるなあ・・・。まあ、後数週間の辛抱やつて」

『頼んだ・・・提督!』どうした!??・・・何!?直ぐに離脱するぞ!機関全力!・・・また軍隊だ、撃たれる前に離脱する。

そっちはその艦をマークしておくから、何かあったらその通信機を使ってくれ!』

通信は切れた。

「さて、頑張つて生き残らなな」

「そうですね、この世界で学んだ事を早速活かせる機会です」

「・・・リイン、今まで何処におった？」

第6次イゼルローン要塞攻略戦（中5） 続

## 第6次イゼルローン要塞攻略戦（中6）（前書き）

師走って毎年の事ですが忙しいですね。↑言い訳？

## 第6次イゼルローン要塞攻略戦（中6）

もはや敵と味方の区別も容易では無くなった混戦のイゼルローン要塞前面の宙域を、この場には似つかわしくない筈の、強襲揚陸艦が駆け抜けていた。

“薔薇の騎士”が乗り込みしその艦は、このような戦いなど慣れ切ってしまった熟練の乗組員の操艦により、少数の被弾こそあれど、致命傷となりうるビームや対艦ミサイルなどを次々と回避しながら目標の敵艦に接舷しては、隊員達を送り込んでいた。

はやて達はシェーンコップの命令で実戦には参加させてもらえなかった。

・・・二隻目の艦に切り込んだとき、自分達が居残りであった事を不満に思ったシグナム、ヴィータがシェーンコップに聞いたのだした。「シェーンコップ大佐、なぜ私達は参加させてもらえなかったのですか？」

「なんだ、そんな事か。」

その事なら、ようはお前達本人ならともかく、それ以外のやつらが実戦に出すには不安すぎるのでは」

「私から見れば、そこまでの問題とは思えませんか？」

「いや、駄目だ。少なくとも精神的に落ち着くまでは、な」

「しかし、戦いを前にして多少の興奮こそあれど、落ち着き無く

している者はいませんが・・・」

「例え話をしてやろう。たとえばティアナなら、見た目こそ落ち着いているように見えるが、今実戦に出させればほぼ間違いなく暴走するぞ。マシユンゴから話を聞く限り、あいつは単に同僚の死が原因で極度の興奮状態に陥った結果、敵に対して躊躇なく引き金を引けたんだろう。しばらく時間がたって落ち着いたら考えが変わるかもしれない」

「・・・他には何があったんですか？」

「それ以外のやつは・・・まあ、似たり寄ったりだ。とにかく時間を置いて落ち着かせて、それからだな。まあ、最初是谁でもそうだろう」

「・・・成程、良く解りました」

シグナムが納得したような、それでもまだ不満は残っているような様子に共感していたのだろうか、ヴィータがシグナムと共通の不満を口にした。

「・・・でも、なんでそれがあたしらまで戦いに行っちゃいけない理由になるんだよ、シェーンコップ大佐？」

「・・・ヴィータ！」

大佐、というかなり階級の離れた上官相手に話すには少々相応しくない言葉使いだが、誰かれ構わず対等の口調で話していたヴィータにしてみれば、これはまだ進歩だと言えるかもしれない。

シグナムはヴィータの口調を直そうとしているが、半年かけてこの

結果である。

もつともシェーンコップも堂々と上官に対して毒舌等の不敵な態度をとっているあたり、似たようなものかもしれない。

少なくとも、シェーンコップはヴィータの口調をとがめた事は一度もない。

「部下のお前は上官を無視して自分だけで戦いに行くつもりか？」

「・・・いや、そういうわけじゃ・・・」

「それが理由だ」

「・・・解ったよ」

イゼルローン要塞、帝国軍司令部

この司令部には、今まさにシェーンコップ達のから狙われているリユーネブルク少将が呼び出されていた。

「わしはな、リユーネブルク少将、卿ならずとも、たかだか一少将の身の上など関わってはおられんのだ」

ミュッケンベルガー元帥の突き放したような口調がリユーネブルク少将に突き刺さった。

「卿自身の不名誉だ。卿自身の力をもって晴らすべきであろう」

「・・・成る程」

自嘲するように低くうめいたリユーネブルクは、自分が帝国軍から見捨てられた事を察した。

故国を捨てて敵国に身を投じ、今度は自分が捨てられた。

結局、帝国にも同盟にも、自分の居場所は無かったようだ・・・。

もはや一言も発せず、彼は敬礼を残して退室した。

「・・・生きていても、名誉や栄光とは無縁の人生が待っているだけだ。ならばいっそ、死んだ方が奴自身の為だろう・・・」

閉ざされたドアに向かってらミュッケンベルガーが独語した。

「出てこい、出てこい、リユーネブルク！ 出てくりゃあの世へ直行便、地獄の魔女どもお待ちかね！ 朱に染まった色男！」

上品とは称しがたい即興歌までつくって、かつての連隊長を待ち焦がれていた“薔薇の騎士”連隊の思いは、12月5日14時頃のことであった。

五隻めの敵を襲うため、混線の戦場を移動していた所へ、帝国軍の揚陸艦が衝突してきたのだ。

「リユーネブルクが来たぞ!!」

侵入してきた帝国軍との間に激甚な白兵が展開され、特に先頭に立った男がトマホークを左右に振るい、その度に、精強で知られた筈の“薔薇の騎士”達が手も足も出せずに薙ぎ払われていった。

その男がたたずむシェーンコップに冷笑を投げ掛けてきた。

「渴望に応えて来てやったぞ、未熟者のシェーンコップ。貴様では案内人として不満だが、俺は寛大な男だからな」

ブルームハルトが好戦的な眼光を向けて一步踏み出したが、水平に突き出されたシェーンコップの腕がそれを阻んだ。

「やめろ、ブルームハルト。今のお前ではまだ奴には勝てん」

「そうだ、引っ込んでいるんだな。尻に卵の殻をくっ付けた雛鳥めが」

抗議の声をあげようとしたブルームハルトを無視して、当事者二人は既にトマホークを構えていた。

・・・実はシグナムもリユーネブルクと戦いたい、と思っていたが、ブルームハルトがシェーンコップに止められたのを見て諦めたのはまた別の話。

第6次イゼルローン要塞攻略戦（中6）  
続

## 第6次イゼルローン要塞攻略戦(中7)(前書き)

やっと更新です。

## 第6次イゼルローン要塞攻略戦（中7）

シェーンコップ、リユーネブルクが同時に床を蹴り、トマホークを一閃させ、二つの凶器は、激突するのではなく、神経をそぎとるような擦過音とともに、大量の火花を撒き散らした。

“薔薇の騎士”の二人の連隊長の飛び違い、反転し、打ち合い、苛烈極まる殺人技の応酬は長く続くかと思われたが、意外に短かった。凄まじい運動エネルギーを持った斬撃が空を切ったとき、リユーネブルクに小さな隙が生じた。

「そこまでか、リユーネブルク！」

声と斬撃の、どちらがより強烈であったか、到底瞬時では判断しえるものではないほどの、熱く、重く、破壊力と殺意に満ちた衝撃が、リユーネブルクの右半身で炸裂した。

リユーネブルクは仰け反り、よろめいたが、その場を動かなかった。むしろ、シェーンコップのほうで、自らの斬撃の余勢で大きく平衡を失い、泳ぐ足を踏みしめねばならなかった。

リユーネブルクの右腕は肩口から吹き飛ばされていた。奔騰した鮮血は宙に鮮紅色のオーロラを描いた後、暗く沈んだ色のカーペットとして床に拡散した。

数秒間佇立していたリユーネブルクは、僅かに身をよじると、落雷を受けた大木のように倒れ込んだ。

「・・・何か、言うことがあるか？」

息を整えた勝者は、敗者に低い声を投げ掛けた。

「・・・そうだな、一つだけ言っておこう。貴様の技量が上がったのではないぞ、シェーンコップの青二才。俺の力量が衰えたのだ。でなくて、俺が負けるわけがない・・・」

「そうかもしれんな・・・」

シェーンコップは、率直に先々代連隊長の豪語を認めた。  
この間にも、リユーネブルクの瞳からは急速に光が失われていく。

「・・・エリ・・・やる・・・解放・・・好きに・・・いい」

誰にも知覚されない程の小さな、声と言うより唇の微動のような言葉。最後に、リユーネブルクの命の小さな火は、血の泥濘に沈んだ。

横たわったリユーネブルクの遺体をシェーンコップは黙然と見下ろした。

リンツとブルームハルトが彼の左右に寄り添い、何か言おうとしたとき、シェーンコップとブルームハルトの間からひょっこりと小柄なはやてが現れ、シェーンコップに寄り添った。

“薔薇の騎士”連隊を代表する三人の猛者がその様子に苦笑した後、シェーンコップは真剣な眼差しで言った。

「敬礼しろ。かつては俺達の指揮官だった男だ。勇敢で有能だった……」

欠点には敢えて触れず、シェーンコップは自ら率先して敬礼を施した。

第6次イゼルローン要塞攻略戦は終末に近付きながら、なお戦火は激烈さを増していた。

自由惑星同盟軍のヤン・ウェンリー大佐は舌打ちを一つたて、黒ベレーを脱いでくしゃくしゃの黒髪をさらにかき回した。

このまま戦局が推移し、仮に両軍が消耗の果てに全滅したとしても、帝国軍にはなお無傷の要塞が残る。

・・・当初の作戦案があっさり瓦解した時点でさっさと撤退すべきだと、ヤンは考えているのだった。

ヤンはコンソールから目を放し、メイン・スクリーンを肩越しに見やった。

暗黒の空間を背景に、イゼルローンの巨大な球体は虹色の光彩に包まれていた。

「同盟軍と称する叛乱軍の奴らは未来永劫この宙域で戦ってる訳にはいかんだ。何故一軍を突出させ、奴らの退路を遮断しようとなない!？」

イゼルローン要塞に帰投し、暇をもてあましていたラインハルトは、帝国軍総司令官ミュッケンベルガー元帥におせっかいな上申書をしたため、送付した。

「小賢しい金髪の孺子めが、上官に対して差出口を叩くか。大人しく命令に服しておれば余計な波風も立たんものを」

ミュッケンベルガー元帥は、ラインハルトに対し怒りを見せたが、それでも彼の進言が戦理にかなっている事を認め、老獪な方法で事態を処理させた。

司令部付参謀シュターデン少将を通じ、ラインハルトに元帥の返答が届けられた。

『卿の進言を可とするも、なお成功の可能性に疑問あり。卿自身をもって作戦実行の責任者に擬する意思あれば総司令部は協力を惜しまないであろう』

ようは、自分でやってみろ、と言う事であった。

「とにかくやらせてみる。奴が失敗したら別の手段を考えればよい」  
ミュッケンベルガーは断を下した。

同盟軍の姿勢はやや消極的になっている。

12月7日から9日にかけての攻勢が失敗すると、総司令部では、

致命的な損失を受けぬうちに回廊から出て撤退すべき、との意見が主流になった。

「ヤン大佐の意見では、最早撤退すべしと言う事です。先日、彼が提案したところによると・・・」

言いかけた総参謀長グリーンヒル大将を、総司令官が制した。

「ちょっと待ってくれ、参謀長。貴官の言い方では、ヤン大佐は既に提案案を考えていたようだが、そうなのかね」

ロボス元帥は、ことさらヤン・ウェンリーという“間違つて軍人になった”青年を嫌っているわけでは無い。

ただ一部のなかば個人的な幕僚、例えばアンドリユー・フォーク等を信頼し過ぎる、という悪評があるが、頑迷では無かった。

なおロボス元帥が何か言いかけたとき、オペレーターから慌ただしい緊張に満ちた連絡が入った。

「報告いたします。イゼルローン要塞を出撃した帝国軍の一部隊、総数2000隻程度と算定されますが、戦域を斜行して我が軍の背後に出、退路を絶つかに思われます」

一瞬の沈黙に、ロボス元帥の舌打ちが続いた。

「そいつはまずいな・・・」

ロボス元帥は肉の厚いアゴに片手を埋めて考え込んだ。小さな目の奥で、生体計算機が高速回転しつつあった。

ラインハルトの目的は、混戦域の外に出て、同盟軍の退路を絶つと見せ掛ける事であった。

そのため、左右の同盟軍には目もくれず、その間を天翔けるように

駆け抜け、当然ながらその行軍は同盟軍の注意を引いた。

「逃がすな、追え！」

「追って来たぞ、キルヒアイス。奴らは罠に掛かった」

ラインハルトの表情も声も、昂然たる光彩に満ちて、不安や危機感  
は分子レベルですら存在しなかった。

「卿ら、僅かの狂いも無く、我が節度に従え。ことごとく我が命令、  
我が指示に服従し、誤る事無きようにせよ。卿らにとって他の途は  
無いのだ！」

帝国軍は指揮系統の混乱した同盟軍に対して攻勢に出た。

ウィリバルト・ヨアヒム・フォン・メルカツ大將の指揮は、華麗  
さこそ無いものの、堅実で隙の無い指揮だった。

混戦を激化させず、慎重に距離を置いて同盟軍の背後を砲撃した結  
果、戦場はイゼルローン要塞から離れ始め、混戦は追尾戦場へと変  
化しつつある。

この光景を第三者視点で見れば、たった2000隻の兵力を三万隻  
が本気で追い、ラインハルトの指揮の下巧妙に攻勢をかわし、かわ  
された同盟軍は馬鹿馬鹿しい事に、ますます怒り狂って叩き潰そう  
とするのである。

この醜態を沈静化させたのは、一人のオペレーターの悲鳴だった。

「見る、イゼルローン要塞を！」

その意味を理解しえない者は、同盟にも帝国にも存在しなかった。

イゼルローン要塞の一点に充填された膨大なエネルギーが、ひときわ白く輝き、急速に膨張した。

“雷神のハンマー”がついに己の存在意義を主張しはじめたのだ。

驚愕と戦慄は、文字通り光速で両軍将兵の精神回路を駆け抜けた。

ラインハルトの部隊は、今までの全ての命令に勝る真剣さと迅速さでイゼルローン回廊の天頂方向に向かい、天井に張り付いた。

同盟軍の各艦艇も、必死に回廊周縁部に張り付こうとする。

それは“薔薇の騎士”連隊も例外では無かった。

『見る、イゼルローン要塞を！』

強襲揚陸艦イストリアの艦橋の空気が一瞬で変わった。

「壁に張り付け！」

艦長の短い怒声。

歴戦のクルー達にはそれで充分だった。

「はやて、何かに捕まれ！」

シェーンコップの怒声に、脳の情報処理が追い付かなかったはやて

だが、それまで他の支援艦艇や護衛の分艦隊と共に艦隊の中心付近で直進していたイストリアの、急激な加速と旋回に振り飛ばされかけ、咄嗟にシェーンコップの座っていたシートの背にしがみついた。

必死にしがみついていたはやては、艦橋のスクリーンから見えたものが信じられ無かった。

白く輝く、巨大な光の柱が、つい数十秒前にイストリアのいた場所を通り抜け、そこにいた数千の艦艇が一瞬で“消え去った”。

かろうじて直撃を受けなかった柱の周辺部では、艦体が引き裂かれ、火球と化し、無数の爆発を起こした。

はやての視界を白く、または赤く埋め尽くすその爆発は、一つ一つがその一瞬の美しさの対価に100単位の生命を要求する、死神の花火だった。

「・・・見たか、はやて。 今のが“雷神のハンマー”」。イゼルローン要塞が難攻不落とされる由縁だ。

これが、この世界の“戦争”の姿だ。しっかりと焼き付けろ」

シェーンコップがはやてにそつと耳打ちした。

12月10日17時40分、イゼルローン要塞の攻防は、同盟軍の全面退却をもって終息した。

第6次イゼルローン要塞攻略戦（中7） 続

## 第6次イゼルローン要塞攻略戦（中7）（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

## 第6次イゼルローン要塞攻略戦（後）（前書き）

大変お待たせいたしました。

## 第6次イゼルローン要塞攻略戦（後）

第6次イゼルローン要塞攻略戦における両軍の戦死者は、

同盟軍 75万4900名

帝国軍 36万8800名

同盟はイゼルローン要塞攻略という戦略上の目的を達しえず、被害においても帝国軍を凌駕した。

強襲揚陸艦イストリア

戦闘が終わって生還する身には必ず必要な物が大量に運ばれて来た。

装甲服を脱ぎ捨てた兵士達が、運ばれて来た物“缶ビール”に飛び付き、手から手へと受け渡していく。

「ほら、お前達のだ」

ブルームハルトとマシユンゴはニダース程の缶ビールを箱で持つて来ると、はやて達の前に置いた。

「こいつはな、任務に失敗した死神を嘲笑う、俺達の恒例行事だ」

「隊長達も生き残った以上、これに参加する権利がありますから、遠慮無く飲んでください」

ブルームハルトがはやてに説明し、マシュンゴがはやてに遠回しに強制する。

・・・数十分後、食堂からテーブルを片付けて作った、即席のパティー会場は完全にお祭り騒ぎとなっていたが、それは機動六課メンバーも例外では無かった。

シェーンコップの計らいで、今日だけ飲酒を許可されたエリオとキヤロであったが、エリオはあつという間に酔い潰れて就寝中であり、キヤロは顔を上気させ、可愛い笑い上戸と化して隊員達の間をトテトテと歩き回り、顔を綻ばせた隊員達と一緒に更にビールを煽っていた。

その様子をちびちびと舐めるようにビールを飲んでいたフェイトが心配そうに眺めていた。

「キヤロ・・・もう四本目だよ・・・大丈夫かな・・・」

ちなみにこの缶ビールは500ミリ入りであり、当のキヤロはまだまだ酔い潰れる気配は無い。

「ねえねえティア、良いでしょ、ねえ、ティア？」

「ちよっ、ドコ触って、離れなさいよっ、この馬鹿！」

「はっはっはっ、良いではないか、良いではないか」

「良くないわっ!!」

スバルはティアナにスキンシップを敢行、アルコールの影響も有るのか、普段より過激さ三割増しである。

シグナム、ヴィータ、ザフィーラ、アルフ、ヴァイス等はそれぞれ  
実戦や訓練等で知り合った隊員達と酒を煽り、シャマルも医療を通じて衛生兵達と親睦を深めており、酒は余り進まないが、各々の苦  
労話に花を咲かせていた。

一方、なのは、グリフィス等の、生粋の管理局員達は自分達だけで  
集まっていた。

グリフィスは持ち前の冷静沈着を持って、この軍隊から管理局の為  
に学ぶような事を片端から頭に入れて持ち帰ろうと、周囲の観察を  
続けていた。

そのため、周囲の隊員達からは少々忌避されていた。

なのはは今までの自分の生き甲斐であり、人生そのものと言っても  
過言ではなかった魔法が完全否定されたこの世界で、改めて幼少期  
の感情が呼び起こされていた。

（私は何の取り柄も無い役立たず？）

一旦思考の泥沼にはまると、自分一人では容易には抜け出せない。

（何でこの世界の人々はこんなに笑っていられるの？）

（質量兵器は誰でも使える、人殺しの道具だよ？）

（人殺しは、悪い事なのに、何で当たり前のように殺し合いが出来るの？）

（何で、話し合えば理解しあえる、友達になれるって、解らないのかな？）

（皆、生きる権利があるのに）

（友達になれたかもしれない人を殺すなんて絶対に嫌だし、許せないよ）

思考の泥沼は、自分自身の身の振り方にも及ぶ。

（魔法は、人の為にある正義の力じゃないの？）

（誰も殺さず、傷付かず、それでいて自分の思いを全力で伝えられる、正に理想の力だよ）

（じゃあ何で、皆私の思いを無視するのかな？）

（………そうだ！）

なのはは、或る意味正解とも言える結論に辿り着いた。  
それは、なのはの疑問に全て明快で分かりやすい説明を付けられ、  
なおかつ自分の信念を正しい、と証明出来る素晴らしい理論にな  
のはは思えた。

（そうだ・・・全部、根本から間違ってたんだ）

（私は何を馬鹿らしい事で悩んでいたんだろう）

（この人達は“魔法”を知らないんだ）

（知らないのなら仕方ないよ）

（知らないのなら、私達は“先輩”として、しっかり教えてあげな  
いと）

（魔法の素晴らしさを知ったら、きっと皆も自分達の間違いに気付  
いて、戦争なんてすぐに終わるよ）

「・・・そうだよ。そんな事にも気づかないなんて、私は教導官として失格だね・・・フフッ」

泥沼の中、一瞬沸き起こった“自分達が間違っている”という不安を軽く頭を振って振り払うと、なのはは薄く微笑みながら缶ビールを一気に飲み干した。

喉を通り過ぎていく苦い液体も、この時ばかりは美味に思えた。

グリフィスはなのはに不審げな視線を送るも、ただの独り言だと解ると再び観察に戻った。

第6次イゼルローン要塞攻略戦（終） 完

## 第6次イゼルローン要塞攻略戦（後）（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

## 新たなる予言（前書き）

文中の数値はあくまで私の推定による計算式によって出している物です。

公式データを知っている方、もし居れば御教示お願い致します。

## 新たなる予言

第1管理世界、ミッドチルダ、聖王教会

教会騎士であり、また『予言者』としてのレアスキルを持つカリム・グラシアは、自らが紙に書き留めた新たな予言の解析作業の陣頭指揮をとっていた。

その予言は

『黄金の波と深紅の風、異空より参らん。』

深紅の風を拒みし堤、黄金の波には力及ばず。

ただ呑み込まれゆくのみ』  
という物。

以前の予言は、ある程度文脈から推定する事が出来たが、今回の予言は、はっきり言ってカリムには全く意味がわからない。

『黄金の波』も、『深紅の風』も何を差しているのか意味不明であり、せいぜい『堤』とは管理局の事である可能性がある、という位にしか解析は進んでいない。

それでも、以前のJS事件の例にのっとり、再び世界に何らかの危機が迫っている、と言う事で管理局内では多少なりとも警戒を強めていた。

しかし具体的に分からないと危機感と言うのは湧かない物で、やはり局員達の間は、

「どうせ当たらない」

「仮に当たった所で、俺達が力を合わせればどうにでもなる」といった楽観論で占められていた。

それがどんな未来に繋がるかは、まだ誰にも解らない。

自由惑星同盟首都ハイネセン。

はやて達は以前のようなホテルではなく、シェーンコップ、リンツ、ブルームハルトの三人の宿舎に分散して押し込まれていた。

三人とも将校なので宿舎に専用の部屋があるのだ。

具体的きはシェーンコップの部屋にはやて、ヴィータ（+リイン）、リンツの部屋にライトニング隊のFW陣二人、ブルームハルトの部屋にスターズ隊のFW陣二人となのはの構成である。

因みにフェイトはハイネセン中央病院に居り、シグナム以下その他メンバーは他の隊員達と一緒に、普通にイストリアやホテルに部屋を持っている。

「ガキにはプライベート空間を一人で作る技術は無い。そういうのは大人がそれとなく与えてやるものだ。」

・・・逆に言えば、一人の時間を作れて初めて大人とも言えるな」とのシェーンコップの言葉で急遽、将校用宿舎にFW陣が放り込まれたのである。

子供から目を離さない為に云々、と言う理由とも屁理屈とも取れる物をこねてシェーンコップの部屋に転がり込み、なのは単に病院がここからの方が近いから居座っていた。

因みに、本来ならはやて、なのは共に一応は将校なのだから宿舎に部屋を構えていなければおかしいのだが、二人は士官学校を経ず、シェーンコップがどさくさに紛れて既成事実化しただけの肩書きなので、余計な詮索を避ける事も兼ねて部屋の申請は行っていないかった。

フェイトは既に手術を間近に控えて入院していた。

ハynesに帰ると共にシェーンコップがあらかじめ予約をとっていた病院に叩き込んだのである。

シェーンコップはフェイトが負傷してから直ぐに病院を探しており、病院関係者に軽く金を握らせてベッドと医師を確保させていたのだ。

実は治療に掛かる巨額の費用の捻出の為に、シェーンコップがはやて達の給料を天引きしていたのだが、これはシェーンコップがはやて達の口座を作った張本人であるため（しかも本人には口座の存在を教えていない）口座番号を知っていたから出来た事である。

他にもはやて達を除く隊員達からこっそり寄付を募り、フェイトの事を知る隊員達は皆相当な金額を納めていた。

因みに、例のトリオとマシユンゴはほぼ一月分の給料に匹敵する額を寄付していた。

これと天引き分を合わせて治療費としたのだが、当の本人達がこの事を知るのはまだまだ先の話である。

はやては、フエイトの治療とリハビリが終わり次第、管理局に帰るつもりである事を既にシェーンコップに明かしていた。  
勿論スカリエッティの事も含めて。

今はミッドチルダへ帰った時に役立つよう、この世界について勉強していた。

はやてが最も驚いていたのは、かつての銀河連邦の最盛期には3000億もの人口だったのが、たかだか500年程度で400億にまで激減してしまった事である。

帝国と同盟両軍が一度砲火を交えれば何十万という数の人間が倒れるような戦争を一世紀以上に渡って続けているこの世界は、たかだか80年程度の管理局はどう鼻屑目に見ても敵わないだろう。

比較までに、時空管理局は約70程の管理世界を持ち、約4900万の人員（内訳・陸4200万、海30万、空670万）、艦艇350隻を揃える、人員数だけなら同盟軍に匹敵する巨大組織だが、その九割近くは治安維持を主任務とする地上部隊であり、乗組員が過半を占め、その気になれば最大で30万近い艦艇を動員（短期間ではあるが）出来る同盟軍の艦隊戦力には足元にも及ばない。

最も、これは仕方ないとも言つべきだろう。

あくまで時空管理局は管理世界の治安維持が主任務なので地上優先

なのであり、同盟軍は自国領に侵攻する帝国軍の迎撃が主任務なので宇宙艦隊が最重要視されるだけなのだ。

なので、装備はともかく兵員数において圧倒的に上回る陸戦ならば、戦い方次第では勝利を得られる可能性も高いだろう。

もし戦わば、の話だが。

## 新たな予言（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

## お迎え（前）

「えー、そもそも銀河連邦の発足以前、地球と植民星の間で・・・」

ハインセン、同盟軍士官用宿舎。

ホワイトボードの前に立ち、本を片手に講義を行うヤン・ウェンリ  
ー准将。

部屋の中央に置かれた机にノートを広げているのは3人の女性、は  
やて、なのは、ティアナ。

事の発端は約1週間前。

以前のように再びキャゼルヌ家に食事に招待されたシェーンコップ  
達が、同じく招待されたヤン達に、はやての『お勉強』の事を明か  
したのだ。

「帝国から亡命してきたばかり（はやて達の事をそう誤魔化した）  
で、同盟の歴史や世俗に疎い彼女らの家庭教師を探しているのだが」

「おいヤン、出番だぞ」

「良い家庭教師なら此処に居ますぜ、大佐殿」

「僕もヤン准将が適任だと思います」

その場にいたキャゼルヌと、2人の後輩のアッテンボロー少佐、そ  
してユリアンは即座に息を合わせてヤンを推薦、ヤンが軍に入った

経緯を聞いていたシェーンコップは生徒達を返事も聞かずにヤンに預けて来た。

初めはいきなりの事で渋ったヤンだが、早速道具一式を揃えてきたユリアンらに押され、最後はヤン自身かなり乗り気になって歴史の教材作りをしていた。

「お茶をどうぞ」

ユリアンが人数分、すなわち4個のティーカップを持ってくる。

照明が反射して宝石のように輝く紅茶が差し出される。

「皆さんありがとうございます。念願の歴史教諭の真似事が出来て准将も心の中でコサックダンスを踊ってますよ」

「おいおいユリアン、確かに軍人なんかより百倍遣り甲斐のある仕事だけど、よりによってコサックダンスは無いだろう」

「ならフォークダンスにしますか？僕も初めて見る程の浮かれようですよ、准将。後、授業中にお酒は駄目だと思います」

ユリアンはそう言ってヤンからブランデーのビンを取り上げた。

「参ったな、ユリアンに隠し事は出来そうにない」

時空管理局第1管理世界・ミッドチルダ。

教会からの予言を受けて、管理局内でも以前のJ.S事件の反省から、少しづつではあるが、危機への備えを始めていた。

局員の公募やスカウトを大々的に行い人材確保に努め、主に海の部隊を拡張させる。

これはJS事件の際には地上部隊は防衛で手一杯であり、結局スカリエッティ一党に有功打を与えたのが艦隊と機動六課程度であった、と考えられたことから、新型次元航行艦の建造と、少数精鋭の特殊部隊の新設に力を入れてきたからだ。

具体的には、大小の口径を持つ魔導砲の増強と障壁の出力強化、艦橋や機関部などの重要部の装甲化などで対艦戦闘能力を高める。更にそういった装備の搭載スペース確保のため居住設備を縮小、これにより今まで乗組員の半分近くを占めていた武装隊は艦を降りた。降りた武装隊員から更に隊長クラスの精鋭を集め、10名程度の分隊単位の特特殊部隊として再編成する。

これらの部隊は管理局上層部の期待を集め、英雄の代名詞『ストライカー』の名を与えられ『第〇〇ストライカー分隊』などを通し番号で呼ばれた。

次元航行艦『クラウドディア』。

第122管理外世界の調査も兼ねているこの艦には災難が絶えなかった。

見た目にあまり強そうに見えないので宇宙海賊に狙われる事など日常茶飯事であったし、立场上正式な航路は使えないうえにそもそも解らないので手探りで宇宙を進んだ結果、危険な目にあつた事などもう数えきれない。

しかし度重なる視線と修羅場を乗り越えていった事で、クルーの間には管理局内を探しても右に出る者はいないのではないのか、と思われるほどに強い団結心が生まれていた。

「・・・期限まで、後一月」

期限とははやて達を迎えに行く日の事を指している。

はやてに渡されている通信機では次元空間内においては交信できないため、ずっと通常空間内でさまよっているのである。

クロノは最初こそ責任の重さに胃と頭を痛めていたが、今では平気になり、むしろそれを誇りにしていた。

「提督！」

「何だ！」

「本艦の3時の方向、下方約20度付近に不審船！おそらく宇宙海賊かと！」

「よし、全クルー配置に付け！」

「はッ！」

「さあ今日も楽しい逃避行だ。気合い入れろッ！」

提督席で不敵に笑うクロノ。

彼もまたこの世界の住人と関わったがために大きく変化してしまった者の1人であった。

## お迎え（前）（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

## お迎え（中1）

『友よ、いつの日か、圧政者を打倒し解放された惑星の上に自由の旗を樹てよう』

吾ら現在を戦う、輝く未来のために

吾ら、今日を戦う、実りある明日のために

友よ、謳おう、自由の魂を

友よ、示そう、自由の魂を

専制政治の闇の彼方から

自由の暁を吾らの手で呼び込もう

おお、吾ら自由の民

吾ら永遠に征服されず』

勇壮な高揚感に溢れた音楽が室内に満ちた。

自由惑星同盟の国家『自由の旗、自由の民』である。

いつものようにヤンの宿舎で開かれた『お勉強会』ではやてが流した物だ。

はやてがまだ管理局に入局したての頃、事務仕事のお供に、と地球から携帯に便利な小型の音楽再生機器を持ち込もうとしたが、地球とミッドチルダでは工業規格が違ったため使用できず、改めて買い求めるのも面倒であったため、自らのデバイス『シュベルトクロイツ』で代用していた。

元々『夜天の魔導書』『蒼天の魔導書』『シュベルトクロイツ』『リインフォース?』と4つのデバイスを使い分けていたため、1つのデバイス容量に余裕があり、また高ランク魔導師(SSランク)でレアスキル持ちという実力者であったため、周囲も「任務に支障が無く、また周囲に迷惑も掛けてない」とデバイスを音楽プレイヤーとして使う事を黙認していた。

最近若い局員、特に仕事に忙殺されかねない陸士が彼女の真似をしてプレイヤーとイヤホンを局内に持ち込んでいたりするが、陸上本部・支部の業務内容のブラックぶりを嫌と言うほど知っている現場叩き上げの陸のベテラン達が彼等に配慮して、仕事中の嗜好品持ち込みを許可制とし、これにより陸の効率が多少なりとも改善されたのは公然の秘密である。

また、海や空のベテラン達は

「最近の若者は次元世界の防人としての自覚が足りん！」  
とむしろ取り締まりを強めていた。

どちらにせよ、世間にバレたら

「JS事件で市民からの信頼を失った管理局。しかし局員のモラルは低く、反省の色見られず！」

とその日のニュースで大きく取り沙汰される事は明白である。

何時もマスコミや市民団体に見張られ、窮屈な思いをしなければならぬのは何処の世界の公務員も同じなようである。

話は大分ズレてしまったが、要は、はやてはプレイヤー代わりのデバイスに自由惑星同盟の国家を保存してあったのである。

「・・・壮大な歌だね。えっと、今が宇宙歴795年で、自由惑星同盟の成立が宇宙歴527年の事だから・・・268年前の話だね。当時の人達の不屈の信念が良く伝わってくるよ」

ヤンに教わった歴史知識を海馬組織から何とか引き摺り出して感想を述べるのは。

「そうだね。当初は自分達の居場所たる国家を帝国から守るのが目的だった筈なのに、今や帝国を滅ぼす事が国是になってしまっている。理想は時の流れの中でねじ曲げられてしまった。かのアーレ・ハインセンがこれを知ったら何て思うだろうね」

ヤンも268年前の宇宙に思いを馳せる。

「・・・でも、戦争ってそんな物じゃないんですか？どんな理想も信念も、血の匂いと狂気にねじ曲げられてしまう。それが嫌なら、戦争そのものを止めるしかない、と私は思います」

「なるほど、一理あると思うよ。確かに互いに目的と理想を見失った下らない戦争なんて止めるべきだ」

ティアナの意見にヤンが賛同する。

「では、ユリアンも入れて4人全員に率直な考えを聞こう。何故こんな下らない戦争をだらだらと続けていると思う？」

ヤンが手に持ったマジックの先端でユリアンを指した。

「えっと・・・僕は、恨みだと思います。何故なら、毎年何百人という同盟軍の兵士が死に、その何倍もの数の孤児と未亡人が生まれる。その人達の恨みの念は、帝国を跡形も無く滅ぼそうとする。だから戦争を止めない、止めたくない」

「なるほど、恨みか。確かに百の正論も一の感情論に覆されてしまふ事は歴史上幾らでもあっただろう。ユリアンの論は最もだ・・・では、次はティアナの意見を聞いてみよう」

「はい・・・私は、同盟と帝国の上層部に問題があると思います。いつの時代も、戦争で利益を得たり、人々を煽って思い通りに動かす事で自らの権力基盤を確立しようとする『戦争を利用する者』は必ず居ます。そう言った人達を排除して、周囲を正しい方向へ導くための『自浄作用』がきちんと機能していない事が、戦争が終わらない原因じゃないかと・・・」

「・・・かの銀河連邦も、自浄作用を失って国がよどみ、それらに対する国民の不満がルドルフの台頭を許してしまつた。今、同盟も似たような状況にあると言う事か・・・その通りだと私も思うよ。じゃあ、今度はなのはに聞いてみよう」

「私は、互いが互いを理解していない事が駄目なんだと考えます。戦争が始まってもう百年以上が経つてますが、つまり帝国と同盟はその間、ずっとお互いに交流が無い状態にあります。互いが相手の事を噂でしか知らないから、時が経つにつれて噂に尾びれが付いてもう相手を化け物か何かのように誤解してるんだと思います。覚悟を決めてお話して、少しずつ交流を広げてお互いの事を理解しない限り誤解がとける事も戦争が終わる事も無いと思います」

「・・・同盟政府は帝国の事をずっと『暴虐な独裁国家』として、国民に伝えている。帝国人も同盟人も、その体に流れる血の色は同じだと実感している国民はどれだけ居るだろうかな。君の考えは同盟ではきつと貴重だろうね」

ヤンはそこでいったん区切り、喋りすぎで渴きを訴える喉に紅茶を与えた後、はやての方へ向き直った。

「さて、最後は君か。意見を拝聴しよう」

「・・・上手く言葉に出来ないかも知れませんが・・・私は『恐怖』が原因だと感じます。かつて帝国内では民主共和主義者は酷い弾圧と差別を受けました。それは今も同じですけど、同盟ではこの弾圧を学校でしっかり教えているんですね？」

「私は軍の士官学校ぐらいしか行った事は無いが、確かに繰り返して強調して帝国の残虐さを教えていたね。多分小中学校でも同じじゃ無いかな、ユリアン？」

「はい。毎年その季節が近付くたびに授業はその話ばかりになります・・・でも、はやてさん、その事が何か？」

「えっと、つまり、民主主義は帝国では絶対に受け入れられず、またそれを唱える者には厳しい弾圧が加えられる。同盟国民はそれを常識として知っているから、帝国を恐れている・・・」

はやては少し考え込んだ後、話を続ける。

「例えるなら、自分達の事を殺したい程嫌っていて、しかも自分達を殺せるだけの力を持った隣人が居るとします。私がその立場ならきっと怖くて夜も眠れないと思います。その状況で自分達の方から歩み寄るなんて論外。その危険な隣人を排除しない限り安心して眠れない」

はやての話を聞いていたヤンが納得した顔をする。

「その例え話の隣人が帝国の事で、自分達が同盟の事だね。自分達を殺そうとする意思と力を持った隣人に恐怖する。ごく自然な感情だ。其処に居る事自体が恐怖なのだから、帝国を滅ぼす以外に安心出来る方法が無い・・・正直、私もこの説は予想していなかった。脱帽ものだよ」

感嘆したヤンが、クセの強い黒髪を手で掻き回した。

ちらり、と外を見やったユリアンがやや焦った顔でヤンに話し掛ける。

「あの、ヤン准将」

「どうした、ユリアン？」

「そろそろ時間の方が・・・」

ヤンが時計を確認すると既に午後6時に差し掛かったところであった。

「おっと、いけない。もうこんな時間か・・・ユリアン、大丈夫かい？」

「はい。買いだめは充分です」

「そうか。せつかくだから、君たちも家で夕食を食べていくと良い」

ヤンが予めユリアンと打ち合わせていた申し出に、3人はやや遠慮がちに賛成する。

『クラウドディア』との約束の日まで残り3週間程度の頃であった。

お迎え（中1）（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしています。

## お迎え（中2）

「今日六課の全員に集まってもらったんはな、他でもない管理局の事なんやけど」

「……はやてちゃん、管理局がどうしたの？」

防音性が高いという理由で貸し切りにしてもらった強襲揚陸艦イストリアの会議室に集まったなのは、シグナム以下ヴォルケンリッター、FW陣などのフルメンバーの前で、はやてが明かす。

「皆にはまだ言って無かったからいきなりになって悪いけど、実は管理局から迎えが来とって、その約束の期日が今月末なんよ」

「……え？」

「というのみな、あのスカリエッティが戦闘機人4人連れて脱獄してな、その追跡と再逮捕のためにも、一度アイツを捕らえた実績のある私らに召集が掛かったんよ」

「……！？」

「それでクロノ君がこっちの世界に来てとって、その打ち合わせのためにちよくちよく連絡は取ってたんよ」

脳の情報処理が追いつかずフリーズ中のメンバーをなのはが代表した。

「……ちよつと、はやてちゃん。皆いきなりすぎて困ってるよ……スカリエッティが脱獄したって、本当？」

「みたいやな。管理局も気合い入れて部隊編成を進めとるみたいやし。そして私らが部隊長や」

「だったらこんな呑気にお話ししてる場合じゃないよ！すぐ戻らなきゃ」

「まあ慌てない。そしてここからが本題や」

はやては集まったメンバーを軽く見渡し、

「ミッドチルダに戻ってスカリエッツィ搜索に参加希望の者は拳手！ただしなのはちゃんとフェイトちゃんは強制参加な。隊長格三人がいれば六課の顔も立つやろし、後のメンバーは自由。あ、因みにフェイトちゃんのリハビリは向こうでする事になったで」

「……ヴィヴィオの顔も見たいし、私は喜んで戻るよ。カレル君にリエラちゃんもいるから大変だろうし」

なのはにハウスキーパーとして招かれたアイナは、なのはの義理娘のヴィヴィオの他に、人材不足で一度はクロノとの結婚を機に退職しながらも再び入局したエイミィの双子の子供も預かっていた。

「もちろん、リインはどこまでもはやてちゃんについていきますよ」

シン、と静まり返った部屋で時が流れる事数十秒。

「はやて、なのはが行くのに私が行かなくてどうすんだ」

「なら、フェイトちゃんの看護は私の仕事ね」

ヴィータ、シャマルがまずが名乗り出た。

「フェイトを放っておく事は出来ないね」

「補佐官が部隊長に同行しないわけにはいかないでしょう」

「だったら私も……」

アルフ、グリフィス、ルキノも続いた。

しかし、それ以上の拳手は無かった。

「もう少しこっちに残っていたいです。そうでしょ、ティア？」

「私も、スバルと一緒にです。申し訳ありません」

「……僕はまだ、シェーンコップ大佐に部隊の訓練に参加させてもらう約束を果たしてもらっていません。何が何でも、大佐に僕を認めてもらうんです」

「……エリオ君が心配」  
FW陣の全員、それもスカリエッティとの因縁があるスバルとエリオの2人が非参加を表明した事ははやてを驚かせた。  
ヴァイス、シャリオ、アルトもこちらに残る事を選択した。

「……こつちに残るメンバーの事はシグナムに一任するで。それで良えな？」

更に数十秒待ったが同行希望者が出ず、はやては募集を打ち切った。  
「お任せください。主はやての名に恥じぬよう、私が責任を持ってまとめ上げます」

「……もしかして、結構な人数が残るのを見越してシグナムも残ったん？」

「訓練中の雰囲気から、おおまかには予想していました」

「……そうか。私もまだまだやなあ」

「得手不得手は誰にでもあります。主君の至らぬ点を補うのは臣下の役目ですから、お気になさらず」

「じゃあ、なのはちゃん、フェイトちゃんに話といてな。シェーンコップ大佐には私から言うとききん」

「……シェーンコップ大佐にも？」

「こつちの事情で誰々が隊を離れる事になる、って」

「そう。魔法の事とか、あんまりベラベラしゃべっちゃだめだよ。

ただでさえ管理局とか次元世界の事とか知られてるのに」

「……大丈夫やて」

約束の期日まで残り一週間。



## お迎え（中2）（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

思ったより文字数を稼げなかった……。

### お迎え（中3）

「さあ、クロノ君。こっちは準備できたで」

『ああ、待ち合わせは明日、第22観測基地跡地に午前7時30分。この『クラウディア』と、護衛二隻。変更は無いな？』

「その通りやで。んな、よろしくな」

『了解した』

「ああ、それと」

『どうした？』

「前、アースラで言い合った時の事やけど……」

『……』

「ちよつと言い過ぎたわ。私も反省しとるきん、勘忍してや」

『……素直に謝ってくるとは、殊勝な事だな。で、何をたくらんでるんだ？』

「実はな、メンバーの問題なんやけど……半分以上はこっちの世界においてくことになったから、周囲の説得よろしく」

『……え？』

「じゃあ、また明日」

『ちよ、ちよつと待て、説明をもとめ』

通信機のスイッチが切られ、部屋に再び静寂が戻る。

通信機のバッテリーを抜き取ると、明日に備えてはやてはもう休む事にした。

「リイン、お休み」

「……クロノ君がかわいそうな気が」

「あれぐらいの“通信障害”を失敗の言い訳にするようでは、提督の風上にもおけないで。大丈夫やる、クロノ君は優秀な男やし」

「せめて、何かサービスくらいはしてあげてもいいと思いますっ」

「じゃあ、陸士隊の知り合いに、ミッドの良い風俗でも聞きこんでおこうか。それも熟女系で」

「……仮にも管理局員の言葉とは思えな……いや、もういいです、おやすみなさいです」

「割引券でも渡されたら、どんな顔するんやらかな、楽しみ」

翌日。

イストリアは訓練と称して、再び観測基地、その跡を訪れた。

なお、隊長への忠誠と口の悪さと堅さに定評のある“薔薇の騎士”

連隊でも、一応の情報漏洩対策として、はやて達の事は単なる異動で、たまたまその異動先に向かう艦に便乗させてもらっただけだとしている。

「おー、見えた見えた、懐かしき次元航行艦や」

「確かに、すごい久しぶりだね」

「なのはちよっとうれしそうだね、私もお兄ちゃんに会えるのはうれしいけど」

第22観測基地のある小さな無人惑星の静止軌道上で停止しているイストリアに、三隻の次元航行艦がゆつくりと近付く。

後は帰還組がクラウドディアへ転移魔法で移れば引き渡し完了である。

「シェーンコップ大佐、お世話になりました。この恩は必ず」

「そうだな、ならはやてが後5年経ったら俺の所へ来るといい。そこで恩を返してもらおう」

「5年……?」

「子供と火遊びする趣味は無いんでね。あと背伸びもな」

「えー!?」

「じゃあな」

シェーンコップはそのまま帰還組が集まっている部屋を出ていった。

「……最後まで、何考えてるのか良く解らない人だったね」

「人としては、勝てそうにないかな」

なのはとフェイトはその光景をやや後ろから眺めながら話している。

「……じゃあ、行こうか。皆」

本来の目的である訓練施設に向けて推進を始めたイストリアが充分に離れたところを見計らい、クラウディアと護衛二隻も次元空間へと転移する。

「さあ、はやて。なんでこんなに人数が少ないのか、説明してもらおうか」

「話せば長いんや。事の発端はそもそも……」



### お迎え（中3）（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

なお、今話で銀河リリカル伝説はやっとひと区切りでできる場所まで  
きました。

## 序曲〈オーバーチュア〉

時空管理局・ミッドチルダ。

幸いにも何事も無く帰還する事の出来、港に現れたはやて達を管理局の高官らが出迎え、報道陣の一斉に焚くフラッシュがそれを包み込んだ。

記者達がはやてらを取り囲もうとするが警備の局員に阻まれ、遠巻きに質問をぶつける。

因みに記者を振り切れないフェイトや無視できないであろうなのは、足を引つ張らないように裏口を使って別ルートで機動六課隊舎へ先行していた。

「准将、このたび発見された新たな次元世界について、一言お願いします!」

全記者が一度に大声でしゃべるので聞きとるのも難しい質問に、はやては振り向いて一言だけ言い残す。

「そうやな…ミッドとは180度考え方の違う世界だった!以上、准将からの一言!」

「180度違うとは!?」

「具体的にお願いします!」

「少しで構いません!」

「准将!」

記者団は更に問いかけようとするも、はやてはその間に既に用意された車に乗り込み地上本部へと向かった後であった。

「ヤガミ准将」

「はい……えと」

「グデーリアンだ」

「グデー……えっ！？失礼しました！」

車内で隣に座っていた齡60過ぎほどと思われる地上所属の局員に話しかけられたはやては、少し考え事をしていた事もあり、やや気の抜けた返事を返したが、その相手がクロノから聞いていた故レジアス長官の後任、グデーリアン中將であると気付き慌てて頭を下げる。

この咄嗟の反応の速さもシェーンコップらに軍人の基礎として叩き込まれたものだった。

「いや、気にせずとも良い。それより、君に二三頼みたい事がある」

「はい、何でしょうか？」

「君はあのスカリエッティ再逮捕のために新設される統合特別捜査隊の、事実上の総司令となる」

「はい」

統合特別捜査隊とは陸海空それぞれから優秀な局員を出向させ、統一した捜査指揮を行うべく三提督主導でつくられたものである。捜査隊所属の局員には皆、狙った相手は逃がさない、また闇をあまねく照らすと縁起担ぎで純白のタカを模したバッジを付ける事になっており、はやての元にも早速届いていた。

「さて、君はこの特別捜査隊の組織としての問題点を理解しているかね？」

「……問題点、ですか？」

「理解していないようだな。では説明する」

「……」

「君も聞きかじってはいるだろう、」S事件後の管理局の改革を見ての通り、一向に良くならない治安から、税金泥棒としてたださえ軽視されていた陸士隊が今度は役立たずとして、官民双方からバツシングを浴びている」

「そのように聞いています」

「捜査隊でもその風潮は強く、主だったポストは全て海空に取られてしまい、陸出身の局員はもっぱら連中のパシリのごとき扱いをされているようだ」

「パシリ…それはひどい」

「全くだ。どいつもこいつも華々しい戦果にばかり目が行き縁の下の力持ちの存在を理解しようとしない」

「それが本当なら、由々しき事態だと思います」

「出来る事ならば私自身や、私の信頼できる将官を送り込みたかったのだが、手の空いている者がだれもおらん。そこで准将、君の出番だ」

「小官…いや、私がですか？」

「そうだ。捜査隊所属の高官らを通じて、陸の地位向上に努めてほしい。もちろん無理にとは言わん、あくまで優先すべきは奴の再逮捕だからな」

「わかりました。私共の方から呼びかけてみます」

「うむ。それともう一つ、私は長官になった今、陸全体の改革案を検討している。君も私のもとで知恵を貸してはくれないかね？」

「それは喜んでお伺いいたしますが、何故いつかいの准将でしかない私を選んだのですか？」

「眼を見ればわかる。君が管理局に付いての妙な幻想、例えば魔法絶対視等にはとりつかれていないからだ。そして、地球、更にあの新世界と、魔法を持たず質量兵器に溢れ、戦の絶えぬ世界を直にその眼に焼き付けた貴重な局員だからだ」

グデーリアンは車内据え付きのクローボックスから水を取り出し

口に含み一息つくと、はやてを鋭く見据えドスの利いた低い声で突き刺す。

「だからと言って、質量兵器絶対視や平和主義の全否定も論外だな」

「！」

再び先ほどまでの声色に戻したグデーリおまアンがつぶやく。

「だが、度を越した魔法主義や平和主義よりかはマシかもしれんな。他者と戦う事を忘れた者に進化は訪れない」

はやては彼の言葉に衝撃を受けていた。

「私が、質量兵器を絶対視している……？」

「なんだ、気付いていなかったのか？昔、まだ私が青二才と呼ばれていた頃はまだまだ世界は安定していなくてな、質量兵器の凄まじい力に度肝を抜かれた若い衆によく今の君みたいな者がいたぞ」

「そのようなつもりは……」

「正直に思うところを言え。運転手も含め此処にアレルギー患者はおらんからな」

「……では、管理局はが質量兵器を厳しく取り締まるのは、恐れているからではないのですか？」

「質量兵器は誰でも扱える。だから、そうして武器を持った者の中に、世界を混乱させる危険思想の持ち主が現れる事を恐れている、というのが正解だろうな」

「それは、魔法でも同じ事では無いのですか？」

「ああ。だが魔法と言う力は少数しか扱えぬ。ゆえに、その少数の魔導士を思想・信条も含め徹底した管理体制に置く事でそうした事態を防ごうとしたらしい。幼子を躊躇なく、むしろ優先してスカウトするのも、そうした“絶対正義”の思想を植え付けやすいからだ」

「もしかして、私や高町空尉、ハラウン執務官らも…?」  
「それは君自身が一番理解しているだろう?」

車の前方に、地上本部の巨大なビルが見えた。

「おお、着いたようだ。なめに、反骨精神ごとき若い衆なら大抵一度は通る道だ。君は自分自身を客観的に見つめる事が出来るだろう?」

「……はい」

「私や三提督のような年寄りばかりでは話は前に進まん。今の管理局には、君のような、管理局を一步引いた視点で見る事が出来る優秀な若い世代が必要だ……おっと、私が三提督をけなした事は、内緒にしておいてくれよ」

グデーリアンは好々爺のような優しい微笑みをはやてに向けると、シートベルトをはずし、車を降りる準備を始めた。

序曲《オーバーチュア》（後書き）

御意見、ご感想お待ちしております

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8694n/>

---

銀河リリカル伝説

2011年9月25日02時00分発行